

鶴屋南北論 I——文化年間の芝居

The fiction of TURUYA Nanboku I: 1803-17

葛綿 正一

KUZUWATA Masakazu

はじめに——近松、南北、黙阿弥

近松と西鶴については別稿で論じたところだが（本誌第一号、一九九七年）、そこから浮上してきたのは言語と身体の問題であった。西鶴の言語はきわめて無機的といえる（「文月七日の日、一とせの埃に埋れしかなあんどん・油さし・机・硯石を洗ひ流し、すみわたりたる瀬々も芥川となしぬ。北は金竜寺の入相のかね、八歳の宮の御歌もおもひ出だされ、世之介もはや小学に入るべき年なればとて：」「好色一代男」巻二）。

それに対して、近松の言語からは身体的情動が伝わってくる（「唐猫が牡猫呼ぶとて薄化粧、するはしをらしや、猫さへも、夫故忍ぶに、我が身は、なんと唐打の、エイソリヤ、綱より、解けぬ契りぞや、じやれてそばえて手鞠取れ取れ：」「大経師昔暦」上巻）。

本試論では南北と黙阿弥について論じるが、そこからは言語、身体とともに劇場の問題が浮上してくるだろう。なぜなら、南北や黙阿弥の芝居においては劇場の仕掛けが不可分だからである。

本舞台三間の間、二重の世話屋体。向ふ、反古張り付きの襖。上の方に、破れ障子を立てたる一間の屋体。よきところに、小さき対立、二枚折りの交張りの屏風。いつものところに、門口。ここに灸すゑの看板と、奉公人口入れと書きし看板を二枚並べて掛けてあり。ここに宅悦、按摩の拵へにて、捨て台詞にて、行燈をともしゐる。流行唄にて、道具とまる。（郡司正勝校注、新潮古典集成『東海道四谷怪談』初日序幕）

このように舞台装置が台本に書き込まれている。そして、舞台転換が重要な働きをなす。南北劇の特徴といえる「ケレン」「早替わり」は舞台装置なしには不可能な技である。

ところで、鶴屋南北『東海道四谷怪談』（文政八年）で強調されているのは、焼け焦げたものではないだろうか。

お灸の場面が設定されているからである。「灸をすゑるとは嘘つきの。やつぱり地獄狂ひだらう」と咎められた直助は灸をすえてもらう。

お色 ソレ、皮切りぢやへト灸をすゑるゝ

直助 アツツツツ、これがほんの焦熱地獄、モウよいよい

藤八 たつた一ツでよいとは、ハテ、よくきく灸だ。

(初日序幕)

「ササ、薬だ薬だ。あたためてあげませう」と火を煽っているが、毒を盛られたお岩の顔面は焼け爛れたような状態ではないか。髪梳きで髪が抜けるのも火傷の症状である。広末保『四谷怪談』（岩波新書、一九八四年）は「顔にかかれたドラマ」として作品論を展開するが、ここでは火との関連性を注目してみたい。

伊右 どうだ。さつき貰うた薬は、血の道によいか

お岩 アイ、血の道にはよいやうなれど、呑むとそのまま発熱して、わけて面体にはかの痛み

伊右 なに、熱気が強くてその顔が

お岩 しびれるやうに覺えたわいナへト蚊屋の内より、出て来るゝ

(初日中幕)

これは顔を介した人間的な倫理、いわば顔の倫理が崩れる瞬間である。質草として蚊帳まで持ち出す伊右衛門を押し止めようとしたお岩の生爪は剥がれるのだが、それは表皮に損傷を受けた火傷のような状態ではないか。小仏小平はといえば、傷口に煙草の煙を吹きかけられていた。二人が同じ杉戸に打ち付けられるのも必然性があるといえる。お岩の怨念は鼠となり、「心火」として燃え続ける。

「ドロドロ、心火とともに、鼠むらがり、伊右衛門を苦しむる」というのが結末だが、南北とは火の恐怖を活用する劇作家なのである。伊右衛門が傘張りではなく提灯張り替えの内職をしていたとする本文もあるが、それは燃え上がる芝居のために必要な仕事だったといえる。三升屋二三治『芝居秘伝集』（日本庶民文化史料集成六）には提灯を工夫した話があり、初演時にはなかった提灯抜けのケレンも注目される。蚊遣火が燻され、子供は火が付いたように泣いているが（「抱く子泣く…」）、それらは南北劇の発火点である。逆に、黙阿弥は水の浄化を活用する劇作家といえるだろう（「川端へ、流れ着いたる土左衛門を、引き上げちやア葬るので、綽名になつた土左衛門伝吉…」『三人吉

三廓初買』第一番目三幕目)。

以下、南北の作品を年代順に辿りながら、その特徴を確認していきたいと思う。「四谷怪談」を除き南北作品の引用は『鶴屋南北全集』全十二巻(三一書房、一九七二年)によるが、それぞれ解題からも多くを学んだ〔1〕。ト書きはへで示し、省略は…で示す。

注

〔1〕森山重雄『近世の語りと劇』(三二書房、一九八七年)は南北の純友・将門劇について論じ、同『鶴屋南北絢交ぜの世界』(同、一九九三年)は南北と小幡小平次、皿屋敷、合邦辻、亀山敵討物、隅田川物、桜姫清玄物、忠臣蔵、五大力物、丹波与作物の系譜について論じており、いずれも示唆に富む。近年の論著として諏訪春雄『鶴屋南北』(ミネルヴァ書房、二〇〇五年)があり、多くを学んだ。ほかに鶴飼伴子『四世鶴屋南北論』(風間書房、二〇〇五年)、『歌舞伎』五〇の特集号(二〇一三年)、片龍雨『四世鶴屋南北』(若草書房、二〇一六年)などがある。松田修「鶴屋南北の世界」『文学』一九八二年二月号)は南北における幼児に注目しているが、本試論では泣く幼児と火の関連性を指摘してみたい。累物については、高橋則子「南北累物狂言作劇考」『文学』一九八七年四月号)がある。郡司正勝「鶴屋南北」(中公新書、一九九四年)は「薬も毒薬も盛る人生のドラマのトリックスター」と呼んでいるが、そこに火がかかわることを本試論では強調してみたい。比較論としては守随憲治「南北と黙阿弥」『国語と国文学』一九三三年十月号)があり、河竹登志夫「色悪考」『歌舞伎論集』演劇出版社、一九九九年)は南北に性悪説、黙阿弥に性善説を指摘している。

一 文化年間前半の南北

1

文化元年の夏狂言『天竺徳兵衛万里入船』(全集一)は並木正三『天竺徳兵衛聞書由来』(宝暦七年)を踏まえる。第一番目三建目は下賀茂鳥居先の場、同社内亭座鋪の場、同拝殿神事の場であり、四建目は宗観屋鋪の場、同裏手樋の口の場である。五建目大詰は城外松並木の場、今川家館の場である。間柴久吉を狙う主人公が巨大な蝦蟇に乗って

いる姿が見どころであろう。

徳兵 扱は里見左京が計らひにて、この徳兵衛をからめ取んづ結構よな、何こしやくな事を。(…)

四人 取った、(…正面黒まくにて見切り、この家根の真中に、誂への大がま乗てゐる。この上に徳兵衛、早拵へ糸のたれ四天、着込にて、印を結びゐる体、徳兵衛下タを見おろし、につたりこなし。大がまばつくり口を明く。チョント木の頭、ギザミに付、大がまの口より火煙を吹出す。しじふ大どろどろ、早笛けはしく、

ひようし幕(第一番目四建目・宗観屋鋪裏手樋の口の場)

このように南北の芝居では火煙が演劇構造上、重要な役割を演じている。座頭姿の主人公が本水に飛び込み、すぐさま上使として再登場する水中早替わりのケレンが評判であつたようだが(古井戸秀夫「天竺徳兵衛」『歌舞伎・問いかけの文学』ペリかん社、一九九八年)、「火ぶたを切ふか」という台詞が素早さを促していた点に注目しておきたい。

文化元年の顔見世狂言『四天王楓江戸粧』(全集一)は前太平記の世界で、源頼光とその四人の家来が活躍し、謀反人平将門の遺児相馬太郎良門と辰夜叉が天下の騒乱を企む。序びらきが備わり、第一番目三建目は愛宕山の場、岩倉山の場、四建目は三島明神の場、足柄山の場であり、五建目小幕は一條戻橋の場、五建目は平井保昌館の場、六建目は暫の場である。五建目小幕と第二番目上幕の紅葉ヶ茶屋の場が南北の担当とされる(全集解説を参照)。

岩倉山の場では陰火とともに辰夜叉御前が墓石から蘇る。「大どろどろにて、蜘蛛下りて松の元にてきへ、ゑんせう火ばつとたつ。せうちう火もへる。辰夜叉、むつくと顔を上げる」。一條戻橋の場には二つの世界が垣間見える。風鈴そばや「また火」で暖まる人間の世界と泣く子が犬に銜えられる寒々とした動物の世界だが、その中間で繰り広げられるのが南北劇であるように思われる。

平井館の場は公卿が辻君となる趣向で、和泉式部までが煙草を吸っている。煙草盆を引き寄せる仕草は、最後に重大な結果をもたらすだろう。

まさ ドレ、こたつの炭などついでこよふか。(…)

伝七 某が兼ての大望、直に今宵が大事の場所。(トたばこぼんを引寄せる。この時かすめたる雷序になり、前

の雪の上に狐火もへる。だんだん雪とけ、小狐丸の太刀出る模様…… (第二番目上幕・紅葉ヶ茶屋の場)

煙草盆を引き寄せると、狐火が燃え上がり雪が溶け、探し求めていた太刀が出現する。「狐火沢山にもゆる」というのが結末にはかならない。こうした火の演出が南北の芝居を特徴づけていくのである。

文化五年の夏狂言『彩入御伽草』(全集二)は京伝の合巻『安積沼後日仇討』(文化四年)を取り込み、女房に殺された小幡小平次を題材としている。第一番目は山城の国螢ヶ沼の場であり、三建目は小幡の里世話場である。四建目は界川辻堂の場であり、五建目は播州皿屋敷の場である。第二番目序幕は両国鰻屋の場であり、中幕は浅草福井町の場である。小幡の百姓小平次は九州の菊地家に仕えていた下部であったが、諸国巡礼中、螢ヶ沼で若君月若とその乳母敷波からお家の大事を知らされる。悪人浅山鉄山の密書を手に入れ、自らの女房おとわが鉄山の妹であることを知る。しかし、おとわと多九郎によって殺され沼に沈められる。

多九 コレサ、鉄山さまからきた状を、とつくりよんだこの小平次、助けておゐてはこなたといい、わしらがためにならぬゆへ、沼へつき込、このとうりだ。

天南 大じの状は、これ、ここに。へトわたす。おとわ、くわいちうして

とわ まだいきのねがとまらずば、女房のわたしがいんどうでうかめてやろう。(…サア、女房がとどめだ、この世をきよく成仏しなさい。なむあみだぶつなむあみだぶつ。 (第一番目・山城の国螢ヶ沼の場)

小平次殺しは水の場面になっている。しかし小平次の亡霊が現れるところから、火のイメージが強まってくる。おとわは「どれ、蚊やをつるふか」と口にしている。「薄どころどろ、ねとり、ものすこき音して、あんどろ、ほのくらくなり、ゑんせう火ばつとたつて、蚊やの外へ小平次、いぜんのぼうこんにてあらはれ、蚊やの内をちつと見つめ、うらめしげにさしよつて、蚊やの内へすらすらとはいり、女房の枕もとへちかより、きつと見つめゐる。この時、ふしたる女房、うんとうなり出し、おそるる体」。

小平次の亡霊にうなされた女房は「うぬらよつたら月若がしやツらへ焼き印だぞ」と凄んでいるが、南北の毒婦とは火を悪用する人物なのである。近松の残酷な母は、火を介して南北の毒婦へ変貌しているといえるかもしれない。

弥陀 ことに面に焼がねのその跡もなく時綱がしゅこなす尊像うやうや敷、おん手にささげたまひしは。(トかけより、月若がもつたる尊像をとり上げ見て)

扱こそ弥陀の尊像の焼ただしは、若君のおん身がわりに立たもふか、あらあら、

(第一番目三建目・小幡の里世話場)

身代わり観音の挿話が強調するのは、むしろ焼き爛れた顔のイメージであろう。この直後、悪辣な女房は自らの首を失うのである。「女房のおとわ、首なき死がい、のめり居る……この時どろどろ、ゑんせう火たち、蚊やの裾より小平次のゆうれい、女房の首をかかへ、ぼつと小高くあらわれ、女の首をすかし見て、につこりわろう」。

亡霊となった出現した小平次はおとわの首を掻き切り、多九郎も菊池家の忠臣弥陀次郎によつて殺害される。多九郎、実は天竺徳兵衛である。

天下の將軍東山義政の調伏を企む鉄山は、弥陀次郎の姉幸崎を辻堂に閉じ込め指を切り落とし、その血を混ぜた皿で將軍に酒を飲ませようとしていた(血と皿の近接)。幸崎は弟に鉄山の悪事を告げると界川に身投げする。浅山鉄山が器を焼く人物であることはなほ興味深い。

鉄山 將監鉄山、それへまいつて、お使しやへ面談つかまつるでござりませふ。○(へ鉄山、やきあげしかわけへ火をうちかけ、平ぶたいへきたり)……いよいよ今宵子の上刻、武將せんげのみかわらけ、只今ぜうしゆのきよめの切火つかまつれば、さし上まするでござりませふ。(第一番目五建目・播州皿屋敷の場)

鉄山の祖先は將軍家に唐絵の写しを献上した功績で播州に領地をもらい皿屋敷と呼ばれていたが、幸崎の亡霊は菊地の姫に皿を盗み出すよう指示するのである。

鰻屋が舞台となる点も興味深い。

△ イヤモウ、ここのお内儀がお妻といふて座敷へ出られた時は、きよつとしたよい芸者で御座った。賀の八郎兵衛どのもりつばなよい男で御座る。

□ これがまことにお内儀のかばやきじや。(第二番目序幕・両国鰻屋の場)

山東京伝と鶴屋南北の相違は何か。京伝は黄表紙『江戸生艶気樺焼』(天明五年)を書いているが、その読本にお

いては水のイメージが強く腐ったもののカテゴリーが優位にある。しかし、南北は火の演出によって腐ったもののカテゴリーを回避する。二次元の読本と異なり、三次元の舞台に腐ったものを並べるわけにはいかないからである。南北劇における鰻の意義は、その点にあるだろう。

文化五年の秋狂言『時桔梗出世請状』（全集一）は武智光秀を主人公とした時代物になっている。序幕は祇園社の場、饗応仮御殿の場であり（光秀は鉄扇で額を割られ顔に傷を受ける）、二幕目は山崎陣中の場、三幕目は本能寺の場、四幕目は小栗栖村の場、大詰は松下嘉平次閑居の場である。まず二幕目に注目してみよう。

源五 ……モシ奥さまへ。その御祝儀には鰻でもおおごりなされませ、滝水の一升もおかい遊ばされませふ。

八重 これな、私が大名の奥さまになつたよろこびに、そのよふなことで済ませふかいな。

源五 なるほど、奥さまになつた御しうぎがのぼりのうなぎ位でも済まいて。何ぞ有ふて。○ アア何にしないしなさい、この比に一日、芝居をおごりなさい。

南北劇では鰻の焼き物がしばしば話題になるが、それは芝居にかかわっていたのである。南北においては鰻の蒲焼きが芝居と等価であるかのようだ。次に大詰に注目してみよう。

八重 御経にあらぬときの声。

千里 陣所のかがり火、おくりの門火。

嘉平 回向は互に、戦場戦場。

（大詰・松下嘉平次閑居の場）

こうして武智光秀と真柴久吉は戦うことになる。春永が馬盟で酒を飲ませるので「馬盟の光秀」と呼ばれる作品だが、多くの場合、南北の芝居を締めくくるのは火の場面なのである。切髪を売つてもてなした妻の皐月が侮辱され、無念の光秀は「この切髪は越路にて、光秀流浪のそのみぎり、煙もほそき朝夕の…」と述懐する。「上使が来て、切腹を申し渡そうとすると燭台の明りが消えるあたりの演出は、じつにすごい」と評されるが（戸板康二、名作歌舞伎全集解説）、南北は燭台の効果を活かしているのであろう。

文化六年の夏狂言『阿国御前化粧鏡』（全集二）では阿国の世界に累の話が重なっている。累・与右衛門の早替わりが評判となったという（全集解説を参照）。第一番目三建目は佐々木館の場、伊吹山の場、四建目は世継瀬平内の場であり、五建目は元興寺の場、六たてめ四つ目は名古屋館の場である。第二番目五ツ目は生玉境内の場、重井筒の場、木津川堤の場であり、六ツ目は木津川村の場、大切は木津川口の場である。

銀杏の前を無視して、阿国御前は狩野四郎次郎元信に執着し続ける。

瀬平 ヤ、そのおぐしから、生血のしたたり。

お国 ヤ。へつつい立へかかりし血の様子を見て、我ながらおどろき、ウンとのもる。どろどろにて、柱際へ心火もえ出る。瀬平始、後口に伺ふ寒竹、ハツといふ倒るる。これをきつけに、ひやうしまく

（第一番目四建目・世継瀬平内の場）

梳ると血が滴り落ち、火が燃え上がるという演出は『四谷怪談』の先駆けをなすものである。とりわけ燈籠に注目してみなければならない。

お国 秘共、自が心願こめし、仏へささぐる御灯の牡丹のとうらう、今宵もことなふ持帰つたか。

撫子 ハイ、御心願の牡丹の灯籠、持帰りまして、則これに、又いつもの軒へ、へつよき所へ、とうらうをかける

（第一番目五建目・元興寺の場）

こうした「牡丹灯籠」は後で燃え上がることを予感させる。しかも、灯籠は燃え上がるものであると同時に隠し場所になる。

お国 アアラ、無念や、残念や。恨みの念のさりやらず、再び、この途に帰り来て、詞かはせし四郎次郎、ともに奈落へ誘引せん。来たれや元信。

又平 こしやくな事を。

元信 正しく景図は、アノ燈籠。へつ幼子を銀杏の前に渡し、立かかる。どろどろにて、心火もえ上り、とうらうのあたりへ立のぼる。この時、灯籠くだけて、牡丹の花片はらはらと落て、古き仏前のとうらうとなり、系図の一巻、内より落る

（第一番目五建目・元興寺の場）

系図が出現するためには灯籠自体が燃え上がらなければならない。それがカラストロフを引き起こす。「大どろどろにて、焼耐火立て」、ここで「ひやうし幕」となる。

南北の系図とは何か。それは天竺徳兵衛が赤松正則となり（伊吹山の場合）、不破伴左衛門が天竺徳兵衛となる変身と反復の図式である（名古屋館の場合）。同様にして、阿国は累となる。「怪気は女のたしなみとわいへ、累が嫉妬は、お国の一ツは執着」とあるが、阿国の生まれ変わりが累にほかならない。嫉妬すると「焼耐火」が燃え、累の顔に髑髏が張り付く。累が与右衛門の鎌で死ぬ場面にも「陰火もへさる」など火の演出がみられる。

又平 合点の行ぬ、この袖は。

伊平 それを。へトよろめきながら立かかる。大どろどろ、伊平太の連理引と一所に、累、上の方へ宙乗。赤子泣。お宮、又平にすがる。又平、累を見て、挑灯を取落す

累 嬉しやこの子を。（トチョンと頭）

又平 ハテ、あやしや。（ト急度見あげる。よろしくあつて、ひやうし、まく）

第二番目五ツ目・木津川堤の場合

大事な巻物が火吹き竹にすり替わっているというのも南北劇にふさわしい変換であろう（「ヤア、こりや一軸と思ひの外／本にコリヤ、火吹き竹」。南北の宝物は火炎を煽り立てる。

文化六年の秋狂言『高麗大和皇白浪』（全集一）は石川五右衛門を中心に様々な話を取り込まれる。第一番目三建目は聚楽第の場合、七條河原の場合、淀川堤の場合であり、四建目は大津追分の場合、岩木兵衛屋敷の場合、裏手樋の口の場合である。五建目は小西是斉内の場合であり、大詰は根来山三重の塔の場合である。第二番目は浦辻隠れ家の場になっている。冒頭、「すさまじく火を焚て居る」とあるが、釜茹での刑は南北劇にふさわしく変換している。釜茹での刑は五右衛門が壮麗に燃え上がるものではなく、陰湿にその子供を苛むものだからである。

中間 先刻より御覧のごとく、最早油も煮油と相なりましてござります。

弥藤 なるほど、もはや刻限…

（第一番目三建目・七條河原の場合）

岩木兵衛の嘆願によつて五右衛門の息子、五郎市の命は助かるが、岩木兵衛の息子のほうは苦境に立たされる。大切な千鳥の香炉を盗まれてしまったからである。

当馬 ハテ、浮世といふものは、かわつたものだ。岩木兵衛の忤当馬之丞と聚楽の御所に仕官の身で有たれども、御宝蔵宿直の夜に大切な千鳥の香炉奪れしその越度によつて、親人よりは御勘当 このやうにすがたをかへ、夜の内より小鮒を取て商ふも、一ツには千鳥の香炉詮義のため。ハテ町人の世渡りといふものは、らちの明ぬ事ナア。

(第一番目三建目・淀川堤の場)

小鮒を獲るのも千鳥の香炉を探すためだというが、ここには小鮒から千鳥の香炉へ、生ものから火にかけたものへの移行がみられる。

敷島 父上の仰の通り、お装束は残らずこのつづらの内へ早ふ納めて、アノ滝川どのへ。へつたをしよふとする時、風の音はげしく、燈台の火きへる

アアコレ、ともし火が消たわいの。あかしを持ちや持ちや。

(第一番目四建目・岩木兵衛屋敷の場)

岩木兵衛は五郎市を預かることになる。その娘が敷島だが、奥女中の滝川が実は五右衛門の女房りつである。

第一番目大詰に登場する根来の多宝塔は、冒頭の茹で釜に通底するものである。自らが盗賊であるにもかかわらず恋してくれる高麗の皇女を伴うことになった筑紫の権六、実は真柴久吉の近臣、瀬川采女は恋人とともに、そこで死ぬからである。多宝塔は香氣に満ちた生の空間であるかにみえて、死をもたらず容器だったのである。その意味では多宝塔を圧縮したのが千鳥の香炉であろう。

五郎兵衛が香炉を奪おうとした結果、娘りつが死に、五郎兵衛自身も五右衛門に斬られる。

五郎 しそんじたるも娘ゆへ、五右衛門、おのれ。

運八 香炉を渡せ。へ：五郎兵衛火ぶたを切ル。運八にあたり、立身にてくるしむ。この筒音におりつ、ウムト息をふき返し、目を見ひらき、くるしげなる思入レにて

りつ 五郎市、かならず。へト尋る事。兩人見て

五右・当馬 南無阿弥陀仏。

(第二番目・浦辻隠れ家の場)

香炉を奪い合った結果、誰もが焼け爛れる状況となる。石川五右衛門の壮麗な活劇ではなく、人間関係の陰湿なドラマが南北劇だといえる。

2

文化六年の初春狂言『靈驗曾我籬』（全集二）は曾我物に平井権八が登場する。序幕は浜松五社明神の場、二幕目は本庄屋敷の場、石井屋敷の場、小天龍辻堂の場、三幕目は鈴ヶ森の場、四幕目は上瑠璃の場、対面の場、五幕目は厚原曾我両社の場、六幕目は阿部川中嶋村の場、七幕目は吉原仲之町井筒屋の場、大音寺前の場、八幕目は山谷堀船宿の場、船中の場、九幕目は花川戸長兵衛内の場、大切は敵討の場である。

因幡の浪人白井権八は実兄助市の養父本庄助太夫が浜名家の横領を企んでいることを知り、討ち取る。助太夫を殺した権八が「火の用心」を告げる時廻りと出会うところはすべて無言で進行するが、「てうちん」が強調される。「権八、時廻りが、はいている下駄をよこせとおもひ入。時廻り、下駄をぬいで直す。権八はいて又時廻りにててうちんを持つて行とかほにておしへる。時廻り、ぶるぶるふるへながらてうちんを持って先に立、花道へ行」（二幕目・小天龍辻堂の場）。

水右衛門は額に恥辱を受けて石井右内を殺し、その罪を権八に着せようとして失敗し出奔する。

松 モシお御わかいの、一ぶくのんでござりませぬ。

権八 イヤイヤせつしや、たばこは所望でござらぬ。

松 …ソリヤ何、雲助だによつて、この火でのむがきたないか。（三幕目・鈴ヶ森の場）

この諷いを契機として、権八はたちまち八人を斬り殺し、そこに現れた長兵衛と関係を結ぶ。「これは厚原の在所の衆、植付に御苦労でござる／サアサア一ぶくのみませうのみませう」（五幕目・厚原曾我両社の場）。

こうしてみると、火の用心と喫煙の推奨が南北の芝居の導入だといってよい。蠟燭は祝言の準備ともなる。

文太 納戸の古つづらと、仏壇の蠟燭立を持てこひ。

文蔵 畏まりました。（ト納戸口より古つづらと鶴亀の蠟燭立を取て来て、文太夫の前へ直す）

(六幕目・阿部川中嶋村の場)

右内の弟子文蔵は郷土伊丹郷左衛門の娘おつまと祝言を上げる。しかし、妻を汚した近藤沼太郎を討ち取ると師の敵討ちのため出奔する。南北における祝言と暴力の関連がうかがえるところである。

助市は弥市と名乗って吉原の廓に入り込み、養父の仇権八の動静を探るが、傾城小紫に夢中になる。小紫をめぐる権八と助市の達引きが起こる。小紫は煙草を勧める存在にほかならない。

小紫 なさけをあきなふ流れの身なれば、心行にて売る事もござんせふ。マアたばこでものましやんせいなア。

(七幕目・吉原仲之町井筒屋の場)

傾城小紫を身請けしようとする寺西閑心を止めるのが権八である。「なつのむし、とんで火にいるさまを見るかへ。けがれをはらふはこの香氣」と閑心は口になっているが、南北的存在とはいわば火に飛び込む夏の虫なのである。権八は閑心と間違えて助市を殺してしまう。

右内の息子源之丞と仇の水右衛門は山谷堀に隠れている。源之丞は芸者お松と暮らす、浜松屋の主人伊之助はお松に言い寄って殺され、お松も水右衛門に殺される。

仙六 …ドレ、あんどふへ火をとぼそふか。エエ、うるさいこつた。へト門口のかんばん行燈を取て火をとぼし、

ぶたい前へ持行、あんどふを下へ置。伊之助これを見て

伊之 ヲヲ仙六か、モウ暮たな。ドレ、おれも燈ふか。火をかしや。 (八幕目・山谷堀船宿の場)

「コレ、行燈をふみこわしてはわるい。そつちへやつて置なさい」とあるが、些細な諍いから二人は行燈を取り違えて掲げる。その結果、毒薬と良薬の届け先を取り違えてしまうのである。藤川水右衛門が仇とわかるのも、灯りの効果といえる。

水右 さるにても、船底へ何やらん、したたりしと思しが、顔にかかつて俄のなやみ。へト持たる行燈にてあたり、手桶を見付、これにて顔を写し、行灯のあかりをかざし、よくよく見て

扱は最前板子より、船底へしたたりしは、身共が仕込し毒薬であつたか。その毒薬にて半身しびれ、顔へかかつてこのあざは、見まがふ如きは敵持身、世を忍ぶにはさいくつきよふ。 (八幕目・山谷堀船宿の場)

灯り、毒薬、顔の痣、これらが南北においては密接にかかわっているのである。天井から滴る毒薬は江戸川乱歩的だが、顔の痣は毒薬のせいというよりも、火の明かりのせいにみえる。閑心の仲間土手助も額を傷つけられている。

助太夫の娘と判明した小紫にとって権八は親の仇であり、また義理の兄に当たる。小紫は自害し、権八は提灯に囲まれて死を迎える。「門口には捕手の大勢忍びて、挑灯にてうかがふ」。幡随院長兵衛との関係は「鈴ヶ森でしらはの稲妻／わたりに舟の花川戸／ふしぎなちなみで」とあるが、鈴ヶ森は火を通す場所であつたといえる。源之丞が水右衛門を討ち取る亀山よりも重要な場所にちがいない。

文化六年の顔見世狂言『貞操花鳥羽恋塚』（全集二）は馬琴『頼豪阿闍梨怪鼠伝』（文化五年）を踏まえる。第一番目二建目は安芸の国厳島の場、しばらくの場、三建目は三井寺の場、梅津川の場、四建目は讃州松山の場、浄るりの場、五建目は頼政館の場、六建目は高雄山神護寺の場、第二番目大切は宗清隠家の場である。二建目では陰火が燃えている。「陰火さかんにゑんゑんと、のぼるにつけて鶯の、声はしきりになきつる……」。

三建目は三井寺が舞台だが、護摩を焚いて祈禱し続けた頼豪阿闍梨の挿話が、炎上に彩られることはいまでもない。「とまり尋ぬる友鳥、川風さむくふきそらず、くわへ煙管の煙草さへ」、「雑物は、みんな質屋へ置巨燵、火煙で内はひどい明王」、「三井の寺、頼豪阿闍梨は戒壇の、恨みの焰消やらぬ、護摩に黒みしその姿、おそろしくも又いたわしく」と浄瑠璃の歌声が響く。

五建目では頼政の館から大事な香炉が紛失する。「預りの灵猫の香炉紛失○ 高倉の宮を世に立んと、時節を伺ふ折といひ、心ならざる危難じやなア」。香炉の紛失は鼠のせいである。「焰硝火と俱に切り穴より数万の鼠あらわれ、舞台中へかけよる」とある通り、南北においては火を撒き散らすのが鼠の役割だといえる。

六建目は盛遠と袈裟の挿話を取り込んでいる。「座敷の燈し火、吹消なば／南枕のあらひ髪、それをしるしにしのび入り」とあるが、そこで灯りが生死の合図となる。盛遠は袈裟御前の夫を殺そうとして袈裟御前自身を殺めてしまふからである。

第二番目大切では「そのたばこ入には、大事の姿絵が有わへ」という通り、姿絵が話題になっている。その正体は

常盤木、実は逢嶋姫である。

松　夕べたんぼで、拾ったは、こりや、豊国がにしき絵か、モシ、おいらん、おまへの顔に、

常盤　エ、わたしの顔に。

勘八　いかさま、よく似た。へとりに行。松、手ばやく火鉢へ打こむ。煙硝火たつ

松　なむさん、火鉢へ。

（第二番目大切・宗清隠家の場）

南北においては大事なものが決まって火中に投じられるのであり、そこから生首も現れている（どろどろ、ねとり、心火もへて、石首のどくろたちまち生るがごとき義朝の生首）。

文化七年の弥生狂言『勝相撲浮名花触』（全集二）は『楼門五三桐』の二番目として上演されたもので、釣り鐘権助が白藤源太に殺される。発端は柳橋の場、序幕は柳橋大のしの場、本所堀割下水の場、中幕は薬研堀の場、神田川の場、大切に道行の場である。本作で最も無力な存在はひたすら泣き続ける赤子だが、次に無防備な存在は主人公の関取であろう。

お俊　エエ、しらねへものが、アノ続松はどふして産しなさつた。御前の子じやアねへかへ。

源太　続松を、いへ子でないとはいッいつた。

お俊　サア、わたしヤア生れ付て色気のある男はきらいさ。それでツイ、御前と真にかなふなつたじやねへか。

（発端・柳橋の場）

お俊が関取に惚れ子供まで儲けたのは、関取が無防備な真心を有していたからにちがいない。「ヲヲ寒む」と震える二人に必要なのは火だったはずだが（関取、枕箱に蠅そくも有やすよ）、関取は自ら消してしまうのである。そこに悲劇が生まれる。

お俊　ヲヲこワ。今の音は何で有ふネ。

源太　大方、身投だもしれねへ。

お俊　アア気味のわるひ。それじやから、明しを消しなさんなといふたは。

源太 ハテ、枕箱に、火縄も付木も有わへ。これこれ、ここに有もの。

(発端・柳橋の場)

水音がするほうでは陰惨な殺人が行われており、それと距離を取るためには火が必要だったのである。序幕柳橋大のしの場は「入口に長火鉢をすへ、これに串に差たる大きな鯛を焼て居る」という幸せな情景から始まり、「モシ、御関取さま。どふぞ御煙草一ぶく、御貰申たふござります／＼コリヤたいそふな御煙草入でござりますね」と関取もちやほやされている。だが、宝物の短刀しか眼中にない関取は人を殺めてしまう。

権助 切つたぞ切つたぞ。人殺しだ人殺しだ。へ…源太、抱子を懷へ入て、短刀を引たくり、又切下る。権助、

これにて、ウムト倒るるはづみに、源太が提煙草入を帯際より引きり、これを握り居る。源太、これをしらず…
作右 大ぶ子が泣が捨子でも有はせぬかな。アア町内の厄介ものだ。

(序幕・本所割下水の場)

短刀のせいで周りが見えなくなった関取は、赤子の面倒を見てくれていた権助まで殺してしまう。捨て子は厄介者である。誰かが無力な捨て子の面倒を見なければならぬ。とすれば、赤子に等しい関取の面倒を見られる存在もまた必要である。それが坂間の旦那伝兵衛であろう。とはいえ、伝兵衛も完全な人間ではない。

伝兵 南無さん、コリヤ、煙管筒を、

お俊 何ぞへ落しなされましたかへ。

(中幕・葉研堀の場)

関取とお俊の行く末を心配してくれた伝兵衛も全能ではないことが、この一節からうかがえる。伝兵衛の忠告通り、お俊は源太や伴之進に愛想尽かしする。しかし、伴之進は関取が邪魔になつて熱量を高めていく。

伴之 そふだそふだ。モウモウ、腹が立て腹が立て、臓腑がにへかへつて、どふもかふも、かふもどふもならぬ。
どうぞしてくれしてくれ。関取、おがむおがむ。

源太 エエ、やかましいわへ。へとはり倒す。これにて伴之進、しづまる

(中幕・葉研堀の場)

この伴之進こそ盗みを働いていた男であつたことが判明する。「団子挑灯をかけならべ、ここに源太、肌ぬぎ、りしき形にて、伴之進が鑑をとらへて居る」というのが結末である。本作の悲劇性は赤子のごとく無垢な関取が、にもかかわらず無謀な力を有する落差にあるだろう。そのため自らを庇護してくれるものをことごとく失ってしまうのである。

文化七年の皐月狂言『絵本合法衛』（全集二）では夥しい人物が惨殺され、返り討ちにされる。それぞれの作者分担は判明している（全集解説を参照）。序幕は多賀家水門口の場、多賀明神の場、二幕目は鷹野の場、陣屋の場、三幕目は多賀御殿の場、高橋居宅の場、四幕目は四条河原の場、五幕目は道具屋の場、六幕目は倉狩峠の場、七幕目大切は安井福屋の場、合法庵室の場、敵討の場である。

本作は水門を通つて多賀家が所持する霊亀の香炉を盗み出すところから始まり、多くの人物がその煙に人生を操られる。「瀬左衛門さまには、いささかの事にて、勘気をかふむり、只今はまことにその日かせぎ。小揚に雇はれ、又は駕にも雇はれ、よふよふ煙をたてて、命を繋ぎます」と語っているのは問屋人足孫七である。南北において生きるとは煙を立てることにほかならない。孫七が高橋瀬左衛門に勘当を許されお米と夫婦になるときも、煙が立ち上る。

よね 蜜書の文言。

瀬左 コリヤ〇 他言いたさぬ。へト有合ふ大火鉢へみつ書をうちこむ。ゑんしやう火にばつとたつ

幸兵・孫七 せうこ一通、

瀬左 火中いたした。

（序幕・多賀明神の場）

佐枝大学之助が守山軍蔵を斬り殺し、大事な証拠も煙となる。「ドリヤ、私等も一ふく吸ませふ。おもよどの、火をかけて下され」と始まる二幕目は、南北が分担したとされる。この二幕目では子供を手打ちにした大学之助が改心したかにみせて、掛け軸を奪おうとするのだが、その掛け軸には「還悲石火向風敲」の一句がみえる。大学の改心に油断した瀬左衛門が掛け軸を読み上げた途端に鏝で突かれるのであつて、電光石火の展開こそ南北の作劇法である。その瀬左衛門の弟彌十郎が敵討ちをするため、出家して合法となるが、本作はまさに錯綜した辻にほかならない。五幕目は「今行燈の掃除か、馬鹿馬鹿しい」と始まる道具屋の場である。瀬左衛門の末弟孫三郎は、道具屋の養子になつていたが敵討ちをするため、わざと勘当される。後家のりよは与兵衛に香炉を与えている。くらがり峠の太平洋は道具屋の娘お亀を大学之助に差し出すため与兵衛を毒殺しようとするが、誤つて後家りよを毒殺し、それを知られた愛人のお松まで絞殺する。まさに掃除をするかのように、次々と人々が死ぬ。

「うんらいぐうせい、くわばらくわばら／まんざいらく／まんざいらく／これさ、奴さま。そりやおまへ、地震と雷をはき違へたのだ」と始まる六幕目は南北が分担したらしい。ここではまさに「はき違へ」が警戒されている。「必御ゆだんなされますな…この挑灯をお持ちなされませ」と親切そうに口にする太平次が最も警戒すべき人物にほかならない。「エエ、そんなら、さつきに逢ふた旅のお二人り、しらぬ事とてわたしが姉さん、お亀さんとはさつきのおかた。連のお方は与兵衛さま。それが尋る瀬左衛門さまの、お弟御孫三郎さま。お顔をしらぬばつかりに○殊にあなたが、香炉と確かいわんしたが、それこそたしか」と事情を知ったため、お米は二階に監禁されるのだが、蚊遣りの火で階下の与五郎が気づくことになる。

太平 エエ、きつい蚊だア、ドレ、マア明りを付てしんぜう。へトさぐり寄て、与五郎が胸ぐらを取て、白刃をさし付る。この時いろりの蚊いぶしぱともへ上る。時のかね、与五郎、太平次をふり放す。およね、与五郎にすがり思入

(六幕目・倉狩峠の場)

お米も与五郎も太平次に惨殺されるのだが、蚊を煙し続ける短い夏の夜の惨劇は南北の独壇場であらう。「アア、東がしらんだ。ハテ、夏の夜は○モウ、明るそふだ」と太平次が口にする幕になる。この明晰な不条理はクライマックスの残酷さといつてよい。

3

文化七年の春狂言二番目『心謎解糸』(全集三)は『系桜本町育』(安永六年)の書き替えて、本町糸屋の娘お房とお時、本庄綱五郎、半時九郎兵衛、お祭左七が登場する。序幕は深川八幡の場、松本の場、笹藪の場であり、二幕目は本町糸屋の場、同台所の場、同横手の場である。三幕目は大通寺門前の場、同墓所の場、同裏通の場であり、四幕目は深川相川町安野屋の場、同橋の袂の場である。五幕目大切は小石川長屋喜左衛門内の場、同綱五郎内の場、小石川付近の場である。序幕、鶯の左七は裸にされた芸者お糸と抱き合つて「聖天の煮こごり」と口になっているが、追い詰められた二人はまさに火にかけられた存在にみえる。

赤城家の色紙が盗まれたせいで追放された綱五郎は、色紙を探し求めているうち糸屋のお房と恋仲になる。重要な

のは台所のである。お房に横恋慕する番頭の左五兵衛は、縁談を邪魔するため毒薬を飲ませる。

左五 われも釜の下をたいしたら、もへさしをさしくべておけ。火の用心がわるいぞ。このよふに取込な晩は氣をつける。コレ、菓もかけておけ。

与茂 承知さ。そりやアイひが、お房さんはまだ氣がつかねへからこまつたものだねへ。鼠に燃盛りをひかれてはならぬ。
(二幕目・台所の場合)

「火の用心」が南北の芝居を決定づけており、鼠に「燃盛り」を引かれかねない世界といえる。毒殺は時代物にしばみられるが、世話物の手段ではない。毒殺を世話物に取り入れたのが南北の手柄であろう。

毒薬を飲まされ仮死状態になったお房は、大通寺墓所に葬られる。しかし、綱五郎に助け出される。「棺の内に一日二夜ござつたもの、身うちが痛むは、コリヤもつとも」と声をかけているが、棺桶の中の女は後で煮炊きをすることになる。南北の棺桶は必ず火の場面を通過するといつてよい。墓所のダンマリ場面をみてみよう。

へ：左五兵衛、巻火縄をふつて、うかがひうかがひしのび込み、くらがりゆへ、火縄にて、今うめし廟所の塔婆をさぐりあて、火なわをふつて、文字をよふよふ思入れにて

左五 客房院花月信女、施主本町糸屋。○へトよふよふ読む

是だ是だ。○…

へ：四人間違の立廻り。九郎兵衛は白の片袖、左五郎は紙入、めいめい思入れありて懷中する。綱五郎、お房をいたわり、花道にてつまづく。この仕組とたん一度に、拍子幕…
(三幕目・大通寺墓所の場合)

火があれば判然と識別できるのだが、暗闇の中では無言のまま動き回るだけである。南北は、そうした様式的な暗闇を活用する。埋められた持参金を目当てに墓を掘り返す男たちは、鼠に相当するだろう。「四人間違の立廻り」がなんとも喜劇的にみえる。四幕目にもダンマリの場面がある。

左五 南無三、それを。へトふりはなし、迹るはづみに、わざと行燈を打かへす。皆々くらき思入にて、十兵衛さぐりながら二重舞台へあがる。おらい行燈を持、是もさぐりながら二重舞台へあがる。左五兵衛まごつく。
本助とらへて

左助 うぬ、番頭め。(トむしやぶりつくをはねかへし)

左五 その間にここを。(ト逃んとする。うしろへ岩松出かかり居て、火鉢の灰を左五兵衛が顔のあたりへなげ付る。是にて左五兵衛たぢぢとするを、岩松足を取て引かへす。十兵衛、左五兵衛と思ひ左助を引つける)

(四幕目・深川相川町安野屋の場)

顔のあたりに飛んでくるものが南北劇においては重要性をもつ。顔を変形させかねないからである。愛想尽かしをされた左七がお糸を殺す場面も暗闇になっている(「挑灯を切ておとす」)。

綱五郎とお房が夫婦として結ばれた場面を見ると、南北劇が煮炊きのドラマであることがわかる。

綱五 抱て寝はんのまへかたに、煮焚がかんじん。

お房 しつけぬわざを。

綱五 女夫がけいこに。

お房 エ、嬉しうござんす。

(五幕目大切・小石川長屋綱五郎内の場)

このような夫婦の絆に揺さぶりをかけるのが、九郎兵衛である。かつて赤城家の若兎であり、芸者お糸の兄であった。お房の妹お時は小糸と名乗っているが、九郎兵衛はその妹を使い綱五郎を陥れようとする。しかし、九郎兵衛は自らの娘を殺していたことを知らされ、悔い改める。

綱五・十兵 先この通りに。(ト綱五郎、おときがほり物の命といふ字を小柄にて突。十兵衛、九郎兵衛がほり物の命といふ字を、有合焼火ばしを取てやきがねを当る。四人一度に思入有て)

九郎 これは。

綱五 ハテ、成敗は二人りが命、いのちかけてのいのちのほり物、そちも小糸が命を取ふが、身共もこの者の命を取れば、是にて本望達せし道理。

(五幕目大切・小石川長屋の場)

焼き金を当てることで、罪科は消し去られ、罪人は再生することになる。九郎兵衛が盗み貯めた金を差し出し、左七もお糸の書き置きをもって駆けつけ、色紙は無事に戻る。

文化七年の秋狂言『当樗八幡祭』（全集三）は『双蝶々曲輪日記』（寛延二年）の書き替え狂言になっている。第一番目三建目は鴻野館の場、同奥殿の場、侍塚の場、四建目は仲の町の場、駐春亭の場、日本堤の場であり、五建目は千住札の辻の場、小塚原の場、六建目は山崎屋の場である。第二番目序幕は大川橋の場、中幕は田中駕籠屋の場であり、大切は普賢菩薩付近の場、浄瑠璃の場、平岡内の場である。

鴻野の家中、南方十次兵衛は宝を紛失して切腹したとされるが、切腹したのは弟の南与兵衛のほうで、本人は与兵衛と名乗っている。

山崎屋は与次兵衛も与五郎も頼りにならない息子であり、父親の浄閑が「コリヤ日がくれたに、見世へあかしを燈ぬかへ」とあれこれ気を配っている（『役者出情噺』には「八わた祭の下駄の市下品にて役がら相応いたされ油そうじの仕内までよいぞよいぞ」という団十郎への評がみえる）。橋本次右衛門の娘で十次兵衛の妹お照が与五郎の許婚とされるが、与五郎は吾妻に夢中である。与次兵衛は与五郎を駆け落ちさせ、お照と結婚しようとする。それを嫌ったお照は二百両を持ったまま行方不明になる。風鈴そばで、籠かき甚兵衛はその噂を耳にしている。

甚兵衛　ヲイ、からみをしつかり入れて下さい。

与兵衛　承知サ。○（ト荷の内よりそばざるへそばを入、思入よろしく、捨てりふにて盛つて出し）

サア、出来やした。とうがらしはしつかり入れたよ。

（第二番目序幕・大川橋の場）

唐辛子を入れているのは夜そば売八幡屋を名乗る与兵衛だが、南北劇とは香辛料を効かせた芝居といえるかもしれない。そのスパイスが時として毒として作用するからである（宙吊りの死を迎える近松劇に毒殺はみられない）。無惨に殺される女たちこそ南北劇の「辛み」ではないか。「桶のたがが切て」と与兵衛はあわてているが、これは南北における棺桶の主題と響き合うものであろう。南北劇の棺桶もまた「たがが切」れるものだからである。

行方不明のお照は甚兵衛に殺されたが、その持参金で与兵衛は宝を請け出すことになる（引き窓が持参金を強調している）。浄瑠璃場面では吾妻与五郎の恋仲が歌われる。「庭火たく、あまのうずめのながれとて、お釜の前のお徳女郎、あつちの鍋ではちよこちよこ、こつちの鍋ではちよこちよこ」。「今の世の中仲人いらぬ、しつちくはつちくつき煙管」。結末に「だんだん手燭の火にて焼すてる」とあり、宝を盗んだ平岡郷左衛門の悪事が露見する。

文化七年の顔見世狂言『四天王櫓礎』（全集三）は前太平記の世界で、蜘蛛切丸という名剣をめぐる事件が起こる。第一番目三建目は石山寺源氏の間、同本堂の場、櫓の森の場、四建目は京都香堂前切見世の場であり、五建目は頼信館の場、六建目大詰は頼信館奥殿の場、同庭先の場である。第二番目序幕は摂州福島旅籠屋の場、敷津の浦一里塚の場であり、大切は三島明神の場、足柄山の場である。

「保昌が妻の和泉式部、この石山に通夜するは、重代の蜘蛛切の一腰を持参をなし、頼信がかたしるとして祈念する」と盗人たちは嗅ぎ付けている。

当山 …見れば結構な焚き火。さつきから、わしもあてて下さればよいに。

寿太 ムウ、すりや、いよいよこの所に通夜して。…

当山 降魔の利剣、縛の縄。この修行者がからめとる。盗賊めら、腕まわせ。（ト縄さばきする）

四人 そふいや、おのれを。（ト四人打てかかる。当山、紙張の内より以前の一腰を出し、見事に四人を切たをす…）
（第一番目三建目・石山寺本堂の場）

盗人たちの話を聞いていた廻国の修行者当山、実は六郎公連であり、たちまち盗人たちを切り倒す。活劇は火のまわりで起こるのである。四建目、香堂前切見世の場は初代豊国の錦絵が残っているが（大南北全集三の口絵）、「火の用心」と書かれた行燈が際立つ。五建目頼信館の場では、三日月おせんと和泉式部が煙草を吹かしている。

「焼き刃に蜘蛛の形。ありありと見ゆる」と鬼同丸が語っている名刀が蜘蛛切丸である。時純は頼信館に乗り込むが、「火急の訴へ」から正体がばれる。

時純 「伊予の国の住人、伊賀寿太郎成信が人相書。」（トよみおわり、思入有て）

おいとまいたそふ。（ト首桶かかへ立あがる）

保昌 御上使御苦労。

時純 いけ馬鹿馬鹿しい。（ト火鉢へ絵姿を打ち込む。硝煙はつと立つ）

（第一番目六建目大詰・頼信館奥殿の場）

室津権の正時純、実は伊賀寿太郎成信である。絵姿は火に燃えることで真実性を高めるといつてよい。第二番目序幕は、摂州福島旅籠屋の場となる。

お熊 アア、コレコレ、火燈でもぶち割と、六十四文の損じや。馬鹿馬鹿しい。

早枝 お前のかほは。

お熊 油煙で真黒。

(第二番目序幕・摂州福島旅籠屋の場)

ぐれ宿血煙りのお熊、実は良門めのと七瀬であり、早枝は近忠姉である。火による顔の変貌は南北の主題といえるが、誰もが灯りを心配するのが南北の世界にほかならない。二の瀬の源六近忠は「火燈の油煙」で手紙を書いたりしている。この後、敷津の浦一里塚の場は一転して雪まみれとなる。第二番目大切は三島明神の場に足柄山の場が続く。

貞光 女が連るいつもの小僧。もしやあいづが今の雲気の。○よしよし、眠た覺しに一ふく吞で待合せて、二人りが身のうへ。○ヲヲ、それがよいそれがよい。(摺火打を打て、たばこを吸付る)

(第二番目大切・足柄山の場)

碓井太郎貞光、仮に山賤鉄藏である。煙草を一服しているとところに山姥と怪童が現れる。雲の出現にも呼応しているが、煙草の煙は時間を作るのである。「焼き刃に蜘蛛の形。ありありと見ゆる」名剣を介し、南北は様々な火の可能性を探っている。

文化八年の春狂言『陬蓬萊曾我』(全集二)は新春吉例の曾我物であり、三建目は相州杜戸明神の場、四建目は質見世前の場、鬼王浪宅の場、片瀬川の場、大詰は対面の場である。「アア、人の身の上も、丁度この行燈の灯、燈心といふ体があつても、油といふ精力なければ、用には立たぬ暗闇」という鬼王の台詞は興味深い。南北において火は存在そのものを構成している。

祐経 手向けは即ち法の灯し火○ 灯を上げい。

皆々 ハアア。(ト箱提灯を上げる。女形、手燭を差出す)

朝比 コレ、敵の顔を。

祐成・時致 心にとくり（ト思ひ入れ）

（大詰・対面の場）

灯火で顔が照らされ仇同士が出会ったとき、劇は閉じられることになる。

文化八年の弥生狂言『時代世話水滸伝』（全集三）はお家騒動物で、遠州浜名家の重臣中川隼人の息子兄弟が善と悪に分かれる。盗賊になるとの迷信から捨て子にされ、赤松の一族に拾われた兄の二本駄右衛門は足利家の重宝を盗み出し、弟の玉島庄兵衛はそれを探すため盗賊になっている。そこに小万が絡む。

発端は日坂松並木の場、遠州阿波ヶ嶽の場であり、二幕目は浜名下屋敷の場、同奥殿の場である。三幕目は中山竜泉寺の場、浜名浦の場であり、四幕目は大津宿の場、大津本陣玄関の場、同奥座敷の場、同裏手の場である。五幕目は日の岡峠辻堂の場、同谷間の場であり、六幕目は生玉神崎屋の場、七幕目は今宮別荘の場、同裏田甫の場である。発端からみてみよう。

大塔 うらみを散じて、苦げんを助よ。…（ト煙硝火立て、大塔の宮の霊消へる。どろどろ打上げる）

駄右 ハテ、思ひがけなひ守良親王、南朝の御落院、吉野にあるを守り立て、事を起こせとこの連判を、賜わつたのも我手を借りて、いかりを散ぜんおぼしめし。
（発端・日坂松並木の場）

この火を契機として、駄右衛門は謀反を企てる。そのために、駄右衛門は様々なトリックを用いていく。

皆々 この挑灯は。

庄兵 濱名の定紋。左門の頭が同勢と見せ。

駄右 かためをいつわる。

（四幕目・大津本陣裏手の場）

紋の付いた提灯を持つて、相手を騙すのである。また、聞こえないふりをして、火のないふりをして騙す。

庄兵 モシモシ、御庵主、どふぞてうちの火を一つ。（ト駄右衛門、やはりだまつてゐる）

ハハア、つんぼうだそふだ。モシ、御庵主さま。（ト縁をたたき、大きな声をする。駄右衛門、手にて無ひといふ仕方する…）

ムウ、火はなひといわつしやるか。ハテ、こまつたものな。

（五幕目・日の岡峠辻堂の場）

七幕目、今宮別荘の場は、女たちが火吹き竹を振り回すところから始まる。

なべ イエイエ、わたしや今の勝負。へト火吹き竹を振廻す。お孝、是を見て

お孝 こりや、何をまアそのやうな。

なべ ハイ、是は何でござりまする。ヲヲ、それぞれ、わたしは尺八の稽古を。

お孝 こりや、何をまアあほらしい。

(七幕目・今宮別荘の場)

火吹き竹と物差しで剣術の稽古をしていた女は、「尺八の稽古」とごまかし、その尺八から小万の身元が明らかとなる。庄兵衛に惚れていた小万は駄右衛門に殺されるが、何気ない火吹き竹が芝居を煽っていたのである。

二 文化年間後半の南北

4

文化八年の夏狂言『謎帯一寸徳兵衛』（全集四）は『夏祭浪花鑑』（延享二年）の書き替えて、邪魔になった妻を殺害する点で『四谷怪談』の原型といえる。序幕は道具屋の場、両国橋の場、中幕は団七隠家の場、入谷田甫の場、大切は深川中裏の場、洲崎敵討の場である。大島団七は剣術の師玉島兵太夫を殺し、その娘お梶を騙して夫婦となるが、顔に傷を受けた妻を殺す。その姉とは知らず顔のよく似た芸者お辰に横恋慕し、夫の一寸徳兵衛に討たれる。

序幕で、兵太夫の死骸があるとも知らず「どこかの奴が油でもこぼしたとみえます」と口になっているが、南北において血と油は等価の液体ではないだろうか。とすれば、南北劇とは血を燃料として燃え上がる芝居である。続く中幕が鰻を焼く場面から始まるのは、偶然ではない。

（五郎、半助五分ざかやき一ぼんぎしにて、まな板の上にて、うなぎをさいている。よきところに、田楽火鉢、鉄きうかけ、半助はうなぎをかけ、あをひでいる）
(中幕・団七隠家の場)

団七は道具屋息子清七に香炉を盗ませ、取り上げてしまう。勘当され釣舟の三吉となった息子は「もののおこりは、こなたがすすめて、親の内ならよからふと、夜盗にはいつてぬすんだ香炉。あとにてきけば、やしきのあづかり、内

の難儀ときいたゆへ、かへそうには、しろものを、たつた三両にぎらせて、こなたがまきあげ、かへさぬはサ。けふはぜつたいぜつめいだ」と訴えている。しかし、三川屋義平治に脅かされ、こそこそ逃げ出すほかない。

「東の口より四ツ手籠に桐油をかけしを、わかひしゆ武人、菅がき、はだか身にて、棒はなへ小でうちんをつるし、かけ声にて出てくる」
(中幕・入谷田甫の場)

下谷田甫の場では「てうちんのあかり」をめがけてお梶が現れる。団七が借りた金の形に駕籠で連れ去れる娘を救うためである。しかし、団七は「おれが娘をおれが売るに、どこから点のうちてはなひ」と居直る。争っているうちに傷を負ったお梶に「我がおやの兵太夫、おれがころしたその場所で……」と真相を告げ、「かたき同士でも、ふうふは二世、さきへころしてやるほどに、未来はひとつはちすのたのしみ、半座をわけてまつてけつかれ」と止めを刺す。

たつ それ血が付いて。

徳兵 や。へてうちんで見よふとする。ぐわらぐわらとかみなり鳴る。草村よりあつらへのへび、おたつがたへはひゆく。びつくりして

たつ アアコレ、くちなわが。

徳兵 のりのしただり。ウウ。へトせつたをうちつけんとする。へびはおつたへかかるゆへ、わつといふて、てうちんをおとす
(中幕・入谷田甫の場)

お辰、徳兵衛は雷鳴に怯えている。それはお梶の怨念の等価物であろうが、鳴り止んだ雷鳴は香炉や提灯に収まつてしまうようにみえる。

団七 かくし所は。へトあたり見まわし

ヲヲ、さいわい、あのまつりの挑灯へ。

義平 なるほど。へト上につるしある挑灯へかくす

(大切・深川中裏の場)

三吉に盗ませた香炉を団七は提灯に隠している。それゆえ、団七は大事な香炉が見つからないよう人を提灯から遠ざける。

団七 アアコレコレ、その挑灯へおぬしがともしては、わるいわるい。

てる デモ、おかみさんのいひつけ、おまつりの挑灯へみあかしあげては、なぜわるひへ。…
たつ アア、これお照、気がつかなんだ。神さまの御みあかしあげてはわるひわひわいなふ。

団七 ウム、神の燈明あげられないとは、不幸でも有ったか。
(大切・深川中裏の場)

不幸はまさに団七に訪れる。雷が鳴ったので団七とお辰は蚊帳に入り、そこへ提灯を提げた徳兵衛が帰ってくる。団七はわざと帯を解き「おぬしが芸者の時分から、つけつ廻しつ焼ぼつくひ、ツイ団七さまとかふなりましたと、一ト口にいってしまやれ」と大声を出す。団七が抜いた刀が証拠となつて、兵太夫殺しの犯人であることが明らかになる。しかも、お辰は兵太夫の姉娘であつた。

〈徳兵衛、団七を引付け、おたつ一太刀きる。これより禪のつとめにて、徳兵衛、おたつ、左右より団七のわき腹へつき立てる。この内、うしろへ花だし、まつりの挑灯など通る仕かけ〉
(大切・洲崎敵討の場)

本作は隠されていたものがすべて露わになるドラマといえる。帯の謎は火のせいで解かれるのである。

文化九年の春狂言『色一座梅椿』(全集四)は二番目世話で、序幕は柳橋万八の場、序幕引返しは八町縄手の場であり、二幕目は巖随寺の場、三幕目は仲町の場、四幕目は平野町の場、大切は葛飾十右衛門内の場である。

序幕は料理屋の場で、狐拳から始まる。「幕の内より吉五郎、町人のこしらへ、喜七、料理人の形りにて提籠をさげ、定六、町人のこしらへにて、右三人、狐拳をしてゐる」。この三人の中で料理人が負けないとすれば、それは火を抜うからであろう。大名の遠山甚三郎は芝居見物で鰻をおごったりする人物だが(「よくおりおり芝居の楽やへもござつて、鰻をかふのなんのといふ殿さまの事さ」)、それも火にかかわる。本作では金の貸し借りと火の貸し借りが重なっている。

つる マア、いいあんばいだ。なんでも、マアちとづつでも、都合して金をこしらへにやアならねへ。ドレ、マア一ぶくのんで。へト多葉こぼんを、ひきよせ)

エエ、たばこもない。
(序幕・柳橋万八の場)

金を必要としていたのは、盗人引窓と兵衛の妻おつるである。金を奪うとそのまま逃げていく。序幕返しは八町縄

手の場で、鼻緒を切った十右衛門が小松菜売りの仁太から火を借りようとする。

十右 なむさん、鼻緒をけきつたひやうしに、提灯までけた。アア火がかりたいものだ。アアくらい晩だ。

○（トむかふを見て）：

モシ、御無心ながら火を一ツ、おかしなされませ。

（序幕引返し・八町縄手の場）

このとき、仁太と十右衛門の二人が奇縁に結ばれていることが暗示される。盗人と兵衛の兄が仁太であり、与兵衛から大金を預かっていたのが十右衛門だったからである。

三幕目、仲町の遊廓で披露される川柳も、人と人が結びつく「火」のテーマを明示している。

文蔵 どふでよくなつた所が。（ト本を見て）

見番はみな俗名へお線香。

（三幕目・仲町の場）

この川柳によると、男と女をつないでいるのは線香が告げる時間なのである。その間、火は消えたり点いたりする。きた おみやさんは、そこにか。火のきへたこそさいわいのおもてぶせ。（トさぐりさぐりお初をとらへる。お初だまつている。徳兵衛これに聞耳を立てる）

わたしや、おまへにはなしがあるわへ：

（三幕目・仲町の場）

火が消えたり点いたりすることで、取り違えが起こる。取り違えることによって、本心は明らかにする。

三幕目引返し中川筋の場で、甚三郎から金を奪い取ろうとした仁太も、取り違えてしまう。提灯を持っていたも、「なんだかまつくらがりで、うす気味のわるい。地獄の釜屋堀か」と口にするのは仁太である。

仁太 こりやどふだ。どこもかしこもつめたく成つた。こいつは骨おらずにくたばつたが、なんでも毒でもくらつたと見へるわへ。（ト甚三郎のふところより、香るのはこを出して、さぐり見ておどろき）

こりやなんだ。金だとおもつたら、香炉だそうだ。おふかた墓場にあるせん香たての香炉だんべい。いまいましい。（トいなむらの方へほふる。これにて、香ろ、寝ている嘉兵衛にあたる）（三幕目引返し・仲町の場）

高価な香炉も仁太にとっては「墓場にあるせん香立て」にしか見えないが、それは男女の仲をつなぐ線香と等価であろう。提灯は暗闇を際立たせる小道具であり、ダンマリ場面の開始と終結を示すことになる。

十右衛門は与兵衛から大金を預かっていたが、その男が大泥棒とは知らなかったという。「いかにも三百両あづかつたが、大泥棒とは今のむ煙草が毒となれ、夢さしらない十右エ門」。煙草は毒になるらしい。死を厭わぬ仁太は兄が預けた大金を返却するよう十右衛門に迫り、その妻りくの妹お賤を所望する。

仁太　ムム、氣遣ひするな。こふなりやア、野へ出した死人。末期のたばこ、いづくくやるべい。(ト下の方に
て、たばこすい付け。みなみなあきれる)

(大切・葛飾十右衛門内の場)

「行燈へ羽織をきせ」、再び行燈が照らすまで、四人の男女は舞踊のように動くことになる。「十右衛門、お賤の帯のはしをひつばる。帯くるくるととける」、「お賤、帯に引つばられ、つかつかとふとんの上へ来り、仁太にびつたりと抱付く」。十右衛門は仁太の望みを叶えてやるが、十右衛門を恋い慕うお賤はすでに死を覚悟していた。お賤の入水に気づくのは「あみぼんぼり」を下げたおりくである。

りく　ヤア今の水音はぞうりといい、扱はおしづは。(ト井戸をのぞく。この内九平次も伺ひ出て)

九平　ヤアこのつるべには、おれが大事の。(トおりくをつきのけ、つるべ打かへす。中よりい前の香炉でる)

(大切・葛飾十右衛門内の場)

お賤が井戸に身を投げると、その井戸から香炉が出現する。十右衛門は仁太に止めを刺す。与兵衛の妻おつるが奪っていった金も最後に戻ってくる。本作は夜の段が多いと批判されているが(文化十年『役者出囃』)、それは照明の効果を際立たせるためであろう。

文化九年『姿花江戸伊達染』(全集四)は伊達騒動を扱った『伊達競阿国戯場』(安永七年)の書き替え狂言である。飯炊きの場で火を活用せず、むしろ提灯や煙草入が活用されている。序幕は盤堤山のもめであり、二幕目は島原のもめである。

高尾は頼兼を救うため自害しようとしており、それを知った力士の鬻之助は高尾を介錯する。そして、頼兼を狙ってくる男たちを斬り殺す。「鬻之助、皆々の死がいをさぐりみて、おもはずふつたかといふこなし。ぎよつと思入。この内、橋の上より道哲、序まくの医しやにて、小ちやうちんをともし出かかり、このていを見て、挑灯を吹きけし、

川へなげすて、そろそろ来たり、人ごろしのせうこを尋ぬる心にてさぐりまはる」(三幕目 伏見高橋の場)。ダンマリの場を際立たせるのは提灯という小道具である。

豆七 挑灯とお共するも、ろうそくともすぐわん参りに。

たに これいなア。(トふり袖にてたたく)

豆七 シイ。(トてうちんを吹きけし、口をおさへる)

(四幕目・豆腐屋の場)

四幕目は豆腐屋の場となり、油が強調される。「庄屋油あげなべをとつて、うちつける。油こぼれしおも入。これにて、三人一時にすべる」。戸平は「ヤア、コリヤ油あげなべのあぶら、ぶちこぼしたな」と叫んでいるが、三人が同時に滑つてしまう油は喜劇的物質であると同時に、血の等価物として悲劇的物質にもなるだろう。六幕目で仁木弾正が登場し(「ばつとゑんせう火たつ。けむりの内より」、七幕目は対決の場となる。

文化九年の夏狂言『解脱衣楓累』(全集四)は二番目世話で、怪談物である。お吉と心中しようとしていた旅僧の空月は心変わりするが、その亡霊が妹の累に乗り移る。結末で空月はお吉の弟金五郎に討たれ、累は夫の与右衛門に惨殺される。序幕は相州鎌倉住よし祭の場、同放山の場、二幕目は池の端の場、活花稽古所の場、三幕目は飯沼草庵の場、西瓜畑の場、四幕目は羽生村の場、五幕目は絹川堤の場である。

主人公の正体が語られるのは、暗い道中、煙草を吞むときにほかならない。煙草を吸うと、考え事をしているようにみえる。

空月 夜明けぬ内に鎌くらを、放山なるこの道にて、今の夕立、ハテ厳しひ雷で有った。○ 幸ひ向ふに辻堂が見へる。一ふく吸付けて戸塚迄行かふかい。(…)

木下闇にて露を覆ひ、ドレ一ふく呑んで。(トきせる煙草入を出し、たばこ吸付け呑みながら)

…色欲の煩惱にまよい、浅ましき破戒の身、仏罰の蒙りて、天知る地知るに有るまじき三衣の身に邪淫の浮名。恐るべし恐るべし。

(序幕・放山の場)

女と別れようとして旅僧は、死を覚悟した女を殺めてしまう。女が取り出した家宝の短刀を目にし、武士としての

出世を考える。「雷の音、竹笛入の合方になり、おきちの首のもとより白き蝶々舞ふて出る。：空月短刀を鞘へ納めながら蝶々を見て思入」。おそらく、冷たい刃物が空月の冷徹さを目覚めさせたのである。

旅僧は妻と瓜二つの女を助けるが、そのとき「愷気」を目にすることになる。

空月 ムム幸ひここに提灯が有る。かすめるではなけれども、なんぎをすくへば善根善根。(ト附木を尋ね、茶釜の下にて提灯をつけ)

ササ、これを持つてござらつしやれ。

累 ハイハイ、ありがとうござります。(ト空月提灯を差出す。累を見て)

空月 や、そちやお吉。

(二幕目・池の端の場)

累がお吉そっくりであることは、無断拝借した提灯の火で確かめられる。そこに「目印の提灯、だました意趣、覚えたか」と男が斬りかかる。空月は「又愷気か」と口にしているが、本作ではそうした「愷気」が繰り返される。それは焼くことにほかならない。

金五 何のあいづが焼餅を気に懸けて、女房にして片時も居られふか。これから小三といふ名は、焼餅と替へてやるは。(ト小三むつとする)

お袖 それじやによつて、しかられるがこわいわいナア。

金五 何のあいづが愷気をしをれば、直に三くだり半。

(二幕目・活花稽古所の場)

金五郎はお吉の弟だが、生け花の稽古でふざけていると小三から焼き餅を焼かれる。そこに現れた女は金五郎にお吉の遺児を預けようとする。その女を鰻屋で待たせる間、金五郎は小三の継親となつた勘次が置き忘れた煙草入れに目を付ける。「エエ年にも似合はぬこのかますたばこ入れ：何やら書いた物が有るじや」。金五郎に問い詰められると、大事な名号を落とした勘次は磯兵衛と喧嘩を始める。顔を真っ黒にするのは一種の火傷状態であらう。

金五 エエやかましい。喧嘩したくは外トへ出て勝手にせい。マアおれが内ではさせぬわひ。(トそこにある切溜の炭取を勘次にかぶせ、門へ突出し、戸をしやんとしめる。勘次、尻餅ついてわめきながら炭取をとる。顔まつ黒になつている)

勘次 …エエ、この畜生め、寄りやアがるな寄りやアがるな。(ト火ばしを振上げる)

(二幕目・活花稽古所の場)

金五郎は名号を奪つて勘次を殺めてしまふ。「この拍子に行燈むけて、くらがりの思入」となり、一種のダンマリ場面である。金五郎と小三が駆け落ちすると、磯兵衛が二人を追うが、瓜を盗んで捕まる。

千右 これさ、せうもんといふ事は聞いたが章門で済ますとは、あいつに灸をすへて了簡するのかな。

八九 いつせうもんよりは、からかさ灸はどふだんべな。

長太 これはしたり、灸をすへることじやアござらぬ。証文とは紙へ字を書いて、それへ向ふの判を押します。それを則ち証文といひます。

(三幕目・飯沼草庵の場)

ここでは灸と証文の違いが語られているが、にもかかわらず両者の共通性が強調されるように思われる。ともに表面に痕跡を残すことだからである。生ものとしての瓜は盗みによつて、火を通したものになるといつてよい。

提灯の火に導かれて、金五郎と金三は累と出会い、空月のいる飯沼庵室を訪れる。

累 コリヤ盆の挑灯かへ。どふやら、かかしのよふじやわいな。(ト行かふとする。空月袖をひかへ)

空月 アア、またつしやりませ。似寄りの人も儘あれど、これ程迄に。○ …

小三 ヲヲこわ。(ト挑灯を見て、気味悪き思入にて、金五郎へすがる。これにて赤子泣く。累ふり返り、こなし有つて、何心なく揚まくへは入る)

金五 アアコレ、惻りさせて、この子迄が、ヲヲだがよヲヲだがよヲヲだがよ。(トいぶり付ける)

小三 何じややら、ぶきびな挑灯を持つて、わたしは幽霊かと思ふたはいな。(三幕目・西瓜畑の場)

空月が累と吉の類似性を確認するのは、提灯の火に導かれているのであろう。金五郎と小三は、お吉が生んだ赤子を連れ、名号の一軸を所持する。空月は行燈を吹き消した後、再び火を打つ。

空月 たしかここらに。(ト空月火打箱を尋ね取る。金五郎何ふ思入にて)

金五 何を尋ねて。

空月 一寸あかしを。

金五 ヤ。へト思入。空月火を打つ。これをきつかけに木の頭。火打の音にならつて、よろしく、ひやうし満久

(三幕目・西瓜畑の場)

三幕目が閉じられ四幕目が開けられるが、火の受け渡しが場面をつないでいる。「ヤレヤレ、せいが出ました。サアサアたばこにさんせさんせ／ドレ、せどへ出て、寝はらぼふて一ツぶくせふか／それがよいそれがよい」。煙草は休息を意味すると同時に、次の行動に向けての待機状態となる。

与右 …断りなしに泥ずねで家さがしする気か。様子をいやれ。アタ無作法な。○へト磯兵衛を投げ、きつとなつて

女房、たばこ盆かしやれ。

累 アイ。へト煙草盆さし出す。与右衛門あぐらかいて、たばこ吸付ける

(四幕目・羽生村の場)

羽生村にやつてきた磯兵衛は、小三を連れて利剣の名号を持ち出した金五郎を出せと脅すが、与右衛門は反撃している。喫煙には怒りがこめられているにちがいない。

空月は累にわざわざ付け文を書いて押しつける。この付け文は累に押しつける灸のようなものであろう。

空月 無筆とあらば、ぜひがない。心のたけを書いた文言、わしがよんで聞かせませふ。…

ハテ、聞いて下されといふに。へト捨ぜりふにてあらそふ。累、その文を取つて

累 エエ聞きたふもない。へト蚊いぶしの内へ投込む。ぱつとゑんしやう火立登り、薄どろどろ、仏間の厨子の上へ前まくの胡蝶出て舞ふ。寝鳥になる。累うつとりとほうしんする

(四幕目・羽生村の場)

空月は「コレコレ累どの、なぜその文を火中さしつた」と詰め寄るが、累には吉が乗り移っている。

累 エエうらめしい。空月どの。へト与右衛門に取付き、空月をきつと見る。空月この内寝かしたる抱子の枕

元にて蚊やりの火をあをぎ、煙草のみ居る

与右 モシ、空月さま、コリヤマア女房はナニでこのよふに眼のけがは。

空月 今思わずもつらぬきし、このかんざしの傍づへが、思ひがけない累がけが、目しゐとなつたは因果の道理、姉が死にやうの一念にて。

(四幕目・羽生村の場)

空月は死霊の怨念を煽っているのである。金五郎は姉の仇として空月を刺す。「エエ残念な。天命とはいひながら、おきちと忒人り心中と思ひし事を未練にも、我のみ命のばわりて、妹の累を妻となし、武士にならんず身の願ひ、事ならずしてやみやみと、妻を害せし短刀にて、命を命を落すか、エエ口惜しい」というのが最後の言葉である。与右衛門は吉が乗り移った累を殺さざるをえない。

与右 ぜひに及ばぬ。○（ト鎌にて累を切る…）

死霊のわざとはいひながら、水死の稚子、累がなり行き、なむあみだ仏。（ト首をかかんとする。累その手にすがって）

累 殺さば殺せ、与右エ門どの。累が一念この途にとどまり、こなたばかりか妹の小さな、取殺さいで置くべきか。エエ恨めしい。（トどろどろ、しやうちう火もへる）

与右 臨終正念、南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏。（五幕目・絹川堤の場）

こうして累は火によつて成仏するのである。三幕目、四幕目は南北が担当したが、三幕目の証文場面、四幕目の付け文場面は南北の署名ともいえる。

5

文化十年の弥生狂言『お染久松色読販』（全集五）には油屋のお染と丁稚の久松が登場する。序幕は柳島百度参りの場、亀井戸巴屋の場、小梅煙草屋の場、中幕は瓦町油屋の場、大切に庵崎の場である。冒頭、居合い抜き場面は『八犬伝』犬阪毛野の先駆けにちがいない。

本作の展開を煽り立てるのは久松への思いを募らせたお光である。「アノ与四郎が娘のお光がうつぼれて居申は。捨て置と命生害に及びますゆへ、そこでアノ若衆どのに、死なれたお袋がお光を妻せよふと、約束をしもふして…」。後述するように、お光の狂気は火気を帯びているのではないだろうか。本作に煙草屋と油屋が登場してくるのは偶然ではないはずである。

毒婦お六は夫の喜兵衛とともに煙草屋を営んでいるが（「本舞台三間の間、多葉粉見世の体」）、行き倒れの死骸を

油屋に持ち込み、強請ろうとする。

お六 ……たばこの火はねへのかへ。エエ火の用心のいひ内だ。へつずうずうとして居る。九介こわごわたばこばんを持行く

九介 ハイおたばこを。へつ差出す

(中幕・瓦町油屋の場)

近松『女殺油地獄』の油屋が演劇に粘着性をもたらししていたとすれば、南北の油屋は演劇に火の危険性をもたらす。本作を特徴づけているのは悪婆の設定と早変わりの演出だが、それはまさに火の属性にかかわっているように思われる。悪婆は火の極悪さを体現しており、早変わりは火の速さと無関係ではないからである。近松の残酷な母は火を介して南北の悪婆へ変貌するのである。

お六の強請は失敗し、油屋から吉光の刀を盗んだ喜兵衛は久松に殺される。「思ひがけない油屋の騒動」となり、お染は久松に逢いたいと焦る。「エエモ、はやう逢たい、まだかいのふ」。お光も「エエつれない久松さん」と思いを募らせる。「きやつは手取でひつかく事が、大の上手でお情しりよ。赤ひ所へごんぼう焼ておつきよな。浮に浮れて来りける」と猿廻しの鳴物になる(大切・庵崎の場)。恐ろしく素早い展開だが、卑猥な言葉を口にするお光の狂気こそ近松とは異なる南北の魅力であろう。

文化十年の顔見世狂言『戻橋背御撰』(全集五)は前太平記の世界になっている。第一番目三建目は諸羽社の場、三建目引き返しはしばらくの場、花山古御所無言の場、四建目はいく野海道追分の場、笛吹峠奮おろしの場、四建目返しは栗の木村の場、五建目は市原野の場、六建目は摂津介頼光館の場、六建目大詰は隅田川堤の場である。第二番目序幕は羅生門河岸切見世の場であり、大切には浄瑠璃が備わる。

本作では前太平記の世界に火が導入されている。「人間は七ころび八おきといふが、この国連は十度もころんで、挑灯やとまでなりさがり、やみをあゐるいた事はないが、ころびどふし、まだ一度もおきた事がない。しかし出世の手づるにもなるその蜜書、サアサアはやくかへしてくりやれくりやれ」と語るのは、壬生の五郎、実は極爪の九郎国連である(第一番目三建目・諸羽社の場)。密書を奪い合うが、提灯に照らされながらも「ころびどふし」というのが

南北劇の特徴であろう。火を介して出会うのも特徴的である。

源六 モシ、火をひとつ入れて下さいな。

お浦 ハイハイ、お火でござりますか。○〈火入れをとつて、顔見合せ〉

お前はどふやら見たよふな。 (第一番目四建目・いく野海道追分の場)

二の瀬村源六はお浦、実は刑部太郎娘の浦辺と出会い、さらに「火なわ」の火で御厨の七郎俊連と出会う(「火縄」があるが、マア一服のまつしやりませ)。その際、必ず持ち物を交換している点が興味深い。源六とお浦の場合は金と筭の交換、源六と俊連の場合は金印と鏡の交換がなされる。

市原野で焚き火にあたつていた雲助胴六は「その火にあたるなら、酒手をおいて行きやれな」と脅されているが、その結果、手にしていた刀を交換する。

よし お煙草はよふござりますか。

足軽 ここをどこじやと思ふ。頼光公のお館じやは。

よし その頼光さまのお館だから、商いに来たのだが、こなさん、剛氣にやかましくいひなさるの。

(第一番目六建目・摂津介頼光館の場)

「約束の墨附」を持参した煙草売およしはそれを雁に奪われ、たちまち斬られるが、煙草の火は様々な人を結びつけていく。頼光館を訪れる上使の三田源太広綱を装っていたのは、平井保輔である。

園生 申し御上使さま。池の表のあの鴛鴦はかわいらしいじやござりませぬか。

保輔 わしやア、鴛鴦よりはやつぱりねぎ鳥。鎌倉川岸の鶏はうまいやつさ。(トやはり火鉢にて鍋焼きをしてゐる)

園生 食べものの事じやござりませぬ。あの池の鴛のよふに。(ト保輔へ思入れ)

(第一番目六建目・摂津介頼光館の場)

人間の夫婦と鴛鴦は異なるだろう。人間の欲望には火がかかわるからである。さて、早桶に入っていた死体は踏みつけられて蘇る。

よい …死んだらここは、もふ地獄か。コレここは地獄か。おれは死んだか。○（トうろうろ、あたりを見て、路次口の行燈を見つ、路次口をのぞいて見て）

イヤイヤどふやら娑婆で見た路次口、火の用心に路次四ツぎり、紙屑籠のかかつた様子。そんなここは地獄ではない。

（第二番目序幕・羅生門河岸切見世の場）

暗闇のなかで人は自らが死んだかどうか判断できない。しかし、人間世界と地獄は異なるだろう。行燈の明かりが介入するからである。

お綱 アア、もし、炬燵の内は埋み火の、今といふ今七さんと、縁の切り炭いけてある、炭櫃じやゆへに十さんを、この炬燵へはどふもマア御ふせうながら遠慮して。（ト鬼七へ思入れ）

（第二番目序幕・羅生門河岸切見世の場）

これは鬼七女房お綱、実は侍女苦屋が伯父の医者道庵を殺し尊像を奪い、死骸を炭櫃に隠したところである。大切の浄瑠璃では「くべた温石、餅かと思て、取ろと囲炉裏でつい手をやいたの」と歌われている。これによれば、人間の欲望は火とかわる。欲望にまみれたとき、人は火傷するのである。

文化十一年の弥生狂言『隅田川花御所染』（全集五）は岩藤が尾上を草履打ちにする加賀見山物に、清玄清姫の話を取り込みつつ女清玄を創造している。第一番目三建目は相州鎌倉六本杉の場、新清水花見の場、四建目は入間館の場、五建目は辻番屋の場、入間館尾上部屋の場、入間館奥庭の場、家根仕合の場である。第二番目序幕は隅田川梅若塚の場、中幕は妙亀庵の場であり、大切には浄瑠璃が備わる。

平家の残党後藤兵衛盛長と結託する吉田松若丸は、筑紫大友家の重宝、牛王の鏡を奪い天下を狙っている。入間家の姉娘花子は許嫁を失い浅草新清水寺で尼となり、妹娘桜姫は大友家の若殿になりました松若丸を見初める。

冒頭に「柄杓の水の熱湯にもゆるよふすは、ハテいぶかしい」とある。入間家横領を企む岩藤は、同僚の尾上を草履打ちにすることで、摩擦熱を高めているように思われる。

岩藤 …この場になければこなたのしわざ、御朱印の有かしつてか。

尾上 サア、それは。

岩藤 いいわけが有てか。

尾上 サア。

岩藤 サアサアサア。

岩藤 いいわけなければ。(トぞうりを取て、さんざんにうつ。みなみなおもいれ)

(第一番目四建目・入間館の場)

打擲によつて不在の「御朱印」を出来させようとしているが、その摩擦熱が女清玄に燃え移るのではないだろうか。尾上を自害に追い込んだ岩藤が尾上の召使お初に殺されると、霊が女清玄に乗り移り、桜姫を責め苛むことになる。松若君に恋い焦がれる姉の清玄尼は、妹の桜姫に嫉妬し、「姉がつれそふ御方を、よふもそなたはねとつたのふ」と罵っている。妹に毒殺されるのではないかと怯える。

清玄 イイヤ、そなたわこの毒を、姉に与ふる心であらふ。…道しらずとも不義ものとも、たとへすくなき妹姫、こと更世になきこの姉を、毒がいなして、たればからずそやるころか。せうこはすなはちこの白湯にしみこみし毒は相違ない。せうこを見せう、これを見や。(ト茶わんをあたりにある桜のえだへうちつける。うすどろどろ、ふんせう火とともに桜の花ばつとたち、いろかわつて落花する)(第二番目中幕・妙亀庵の場)

桜を炎にすること、これが女清玄のドラマだといえる。「破戒の尼といわばいへ、けふといふけふ清玄が、ねがいこんだる御経も、みな仇事となりはつる。だらくのしるしは今もくぜん」と破戒した女清玄は、浅茅原の無王妙亀庵に暮らすことになる。松若君と桜姫にとつて邪魔者となつた女清玄の殺害を依頼されるのが惣太である。忍ヶ丘寄合辻番の猿島惣太はもと吉田家の家老栗津七郎であつたが、主君の若君と知りながら梅若丸を殺した過去をもつ。

惣太 どつこひどつこひ、桜姫なら迹しはせぬぞ。(トとらへる立まはりに焚柴をふみつけ、これをとつて捨る事。この柴、あろりの内へおちて、ぶすぶすいぶり出す。惣太又なたをふみつけ)

アイタタタタ。エエ、いまいまい。いけ邪魔な。(ト鉈をとつてうつてかかる。清玄尼よけるはづみに、惣太手水鉢へきりつける。これにて桶ばらばらとこわれ、本水さつとこぼれる。このとたんと、あろりの柴

ぼつともへあがる

(第二番目中幕・妙亀庵の場)

水さえ可燃性の物質であり、この燃え上がる演出に注目する必要があるだろう。「コレ、清玄さん、尼でも比丘でも根が女、色になつてはくれまいか」と惣太が迫つても、聞き入れてもらえない。白刃を掴んでいるうちに十本の指がすべて切れてしまい、ついに惣太は女清玄にとどめを刺すが、女清玄が怨念を募らせるのは惣太に対してではない、桜姫に対してである。

大切で鐘の中に入った女清玄は「ひきぬきにて火炎の形になる」。結末の歌謡は以下の通りである。

火責、水責三十六度、等活地獄は一万由旬、まつさかさまに遠近の、奈落へ俱に連行ん、焦るるほのうに瞋恚の炎、突息めう火と吹来る、筑波おろしのとうとうとう…

(第二番目大切・浄瑠璃)

恋する男と妹に裏切られた女清玄は、屈辱と怒りに燃え上がるのである(エウリピデスの女主人公に等しい)。

文化十二年の皐月狂言『杜若艶色紫』(全集五)は愛想尽かしの遊女を斬り殺した吉原百人斬りを題材としている。上巻は向両国の場、萬寿屋寮の場であり、下巻はお六住家の場である。

義弟の金屋金五郎が女かる業玉本小三を身請けする金の工面に困っていることを知った土手のお六は、八橋に執心の釣がね弥左衛門から金が入るのを見込み、願哲とともに八橋と佐野治郎左衛門の仲を裂こうとする。船橋次郎左衛門を名乗る願哲から佐野の探し求める刀をもっていることを仄めかされた八橋は、それを手にいれるため、わざと佐野に愛想尽かしする。怒りに狂った佐野は八橋と弥左衛門を斬り殺す。それは雷の晩であり、蚊遣火を熾し続ける晩である。

づぶ アア、こいつはどうでも鳴てくるわへ。つく波のほうが、がうぎにひかる。蚊いぶしでもたき付て、雷りさまを、どこへやらにやアならぬ。ハテ、うるさく鳴るかみなりだ。(ト火をたいている。ここにかみなり大きくなり、びつくりして) かわばらくわばらくわばら。

(上巻・萬寿屋寮の場)

下巻でお六の入り婿、伝兵衛は自宅の長持ちに佐野を匿っている。拾った書き置きからお六が八橋の姉であること

がわかる。また小三が拾った手紙からは、八橋と佐野の仲を裂いたのがお六と願哲の仕業だったことがわかり、金五郎はすぐさま長持ちの佐野に気づかれないよう火中に投じる。

伝兵　こりや、金五郎、その状をなぜ蚊やりの内へ。

金五　サ、おもわずけがで蚊いぶしへ。

伝兵　そんならお六と名が有ゆへ、わざとかやりへ。(ト思入)

(下巻・お六住家の場)

そこに尋ねてきた願哲は「火をひとつかしなさい」と口火を切る。三川嶋で拾った伝兵衛の煙管と両国で拾った金五郎宛小三の手紙を取り出し、「文かきせるか、きせるかふみか」と強請り続ける。盥の水をこぼすと床下から煙が立ち上り、その隙に小三は手紙を焼いてしまう。

お六　ほんに思へば世の中の。

伝兵　人とたばこのよしあしは。

お六　けむりとなつて後の世にする。

(下巻・お六住家の場)

本作ではいたるところに煙が立ち上って、人々の運命を操るのである。後悔して佐野の罪を引き受ける決心をしたお六は、伝兵衛に愛想尽かしをして、小三を奪って逃げた願哲を殺し、刀を奪い返す。

文化十年『例服曾我伊達染』(全集十二)は伊達騒動を取り入れた曾我物で、しかも累が登場する。第一番目発端は那須野の場、序幕は大磯廓の場、二幕目は大磯縄手の場、高尾丸対面の場、三幕目は土手の道哲の場、四幕目は豆腐屋の場になっている。

伊達の殿様を想起させる頼家は高尾に夢中である。道哲が許婚の高尾を刺し殺す場面では焼酎火が燃えている。

道哲　アアおもひまわしやア廻すほど、のこりおしい事をしてのけたなアア。(ト寝鳥になり、焼酎火もへ、目抜をもった手、しぜんと首のそばへ寄り、切首、目貫をくわへる。ぎよつとおもひいれあつて)

ヤヤヤヤヤ、今きつたこの首がまなこを見ひらき、目貫をふくんで。(トおもいれあつて、じつとくびにむかつて)

高尾わりやア、首になつてもまだ死なないな。

(第一番目二幕目・大磯縄手の場)

道哲は心中するつもりであつたが、出世に目がくらみ死を思い留まる。頼家が乗り込む船は高尾丸と呼ばれるが、火が燃えている。「あまの焚火と見まがふばかり、せうせうたる陰火、忽然ともへあがりしはこころへぬ／けがれをはらふ御船の辺り、芥とともにあやしき火かげ」。

高尾は頼家に殺されたと噂され、道哲は庵室に隠れ住む。高尾の亡霊が現れる場面で火が燃えていることはいうまでもない。「香炉の火はつとたちのぼり、高尾、半眼を見ひらき、道哲をうらめしげに見つめる」。道哲は「両眼見ひらきて、恨といふべきその顔色」に怯える。

道哲のもとに累が逃げ込む場面も同様である。

道哲 モウ氣遣ひはござらぬ。さぞさむかろうに、ここに火鉢がござる。焚き火してあててしんぜう。…

類 エエまア何をおつしやります。今の焚火でおまへのおすがた。コリヤあなたさまは御出家さまでござりまするかへ。

(第一番目三幕目・高尾丸対面の場)

南北劇においては焚き火の炎で正体が判別できるのである。累は高尾の妹であつたことが判明する。道哲は厨子を開けることを禁じている。高尾の怨念が籠もっているからである。

道哲 あけまいぞ。へつきつとおもひ入。どろどろになり、仏壇より落たる卒塔婆、おのれと走つて、累が裾へ

まとふ。包のうへへ心火もへる。いの、何ふ

テモ、執念。へトあしにて、卒塔婆をふみわる

(第一番目三幕目・高尾丸対面の場)

こうした高尾のもつ火の「執念」が陰謀を未然に防ぐことになる。金兵衛は頼家の子を孕んだ幾野を五十兩のカタに連れ出そうとして、止められる。「金をとうちのあかりにて、あらため見る。この時、頼家、いぜんのてうちんの反古に目をつけ、おもいれあつて」(第一番目四幕目・豆腐屋の場)。この反故紙から、頼家を陥れようとした弾正直則の企みが露見するのである。

文化十一年の秋狂言『染繻竹春駒』（全集六）は重の井を男に置き換えた男「重の井」の世界になっている。第一番目序幕は東山下館の場、二幕目は四条河原の場、三幕目は由留木館の場、四幕目は関地藏前の場、五幕目は沓掛村の場、六幕目は坂下駅の場、七幕目は祇園町の場、八幕目は栗田口敵討の場である。

調姫が関東の人間家に嫁入りするに際して、家老の左内、八平次はお家乗っ取りを企む。左内が系図を奪うためと三郎を殺すが、その子重井新左衛門が小万の助けで左内を討つ。

与茂 うなぎを喰った附馬は珍らしいわへ。へへ…

与三 …無心ながら、火をひとつ貸さつしやひ。へと両掛に附し、飛脚燈灯を出し、火を借りる

お作 …あなたは伊達の、与三郎さまじやござりませぬか。 （第一番目二幕目・四条河原の場）

鰻を食らう場面で強調されているのは、火を通したものである。「この鉄弓の上であぶつて行ふ。へへ」そつくりかうして乾すがよひ。これが本の、手紙のかばやきと云ふので有ふ」。団助は密書を所持しているが、大事な手紙も炙られるのである。

くら アレアレ、煮返しがこぼれまする。奴様、見て下さりませ。

団助 おつと合点だ。

くら もしもし、その火の無駄にならぬよふに、その薬を掛けて下さりませ。

団助 ヲツト合点だ。 （第一番目五幕目・沓掛村の場）

本作において団助こそ、もつとも火と親しい関係を結ぶ人物であろう。

慶政 きたきた、あるぞあるぞ。時に大分煮へ爛にしたな。今迄は冷や酒を、豪気に煮へ爛にしたな。…

慶政 アア、これこれ、こりやア葉じやアないか。 （第一番目五幕目・沓掛村の場）

これを見ると、南北において葉毒とは熱を加えたものといえる。おさんと義兵衛は煙草を介し結ばれている。さん かかさん。お菓の火を入れてあげなさんせ。

義兵 一ふくのんで行きませうか。…

さん お菓をあがりませいな。

義兵 アイアイ、これは気のつゐた。：

さん イエイエ、こりや、おたばこの火を、入れて上ませうかと。

義兵 アア、そこで屏風を○コレ、ちやつと莩を吸附て下さひ。

さん アイ。

（第一番目五幕目・沓掛村の場）

女馬士じねんじよのおさんは煙草を勧める女であり、山形屋義兵衛は煙草を勧められる男である。では、左内の弟、座頭慶政の役割は何か。

くら どりや、行燈を灯しませふか。

慶政 アア、きつい蚊だ。

その筈よ。まだ行燈を灯さねへ。

（第一番目五幕目・沓掛村の場）

座頭は行燈が灯されたか知らないふりをして、団助から名刀を盗み取っている。その名刀はもともと兄の持ち物だったのだが、結ばれた二人のすぐ側で孤独に刀を点検するところに座頭の凄みがある。六幕目坂下駅の場で、左内は証拠の書き物を燃やす。

左内 これで伊達家の根を絶やした○書物、これへ。

旅奴 ハツ。

左内 灯を持て。

旅奴 ハツ。へト提灯をたたみ、さし出す。左内、書物を蠟燭の火にて焼捨てる…

（第一番目六幕目・坂下駅の場）

大事な書き物は燃える。しかし、火は無駄にならない。八幕目は栗田口敵討の場である。

右馬 われは人足だな。小万はどふした。

雲介二 それそれ、その提灯を目当にして、今ここへ来ます来ます。

皆々 イヤアイヤア。へト右馬之助、提灯を消す

左内 来をらぬ前方、系図は貴殿へ。

（第一番目八幕目・栗田口敵討の場）

提灯はすぐさま消されるが、小万はやって来て、仇討ちが成し遂げられる。火が目印になるのである。

文化十三年の春狂言『容賀扇曾我』（全集六）は新春吉例の曾我物である。第一番目三建目は砥上ヶ原の場、四建目は城前寺の場、五建目大詰は箱根山対面の場となる。本作の中心には焼き印の場面が置かれている。

小藤 まだまだ、いけいけまぢまぢとした、しやつ面へ、盗賊ひろいだ後日の極印。○（ト団三郎を引よせ、顔へ焼き印をおしにかかる。忠常、小藤太を突き廻して、落たる切手を手早く取て、団三郎が顔へあて、又来る小藤太が手を持添へ、右の切手へ焼き印をおす。みなみなおもひれ）

六 忠常様の計らひで、

祐成・団三 切手へ焼き印据りしは、

忠常 今こそ揃ふ狩場の通用。

小藤太は団三郎の顔へ焼き印を当てようとして、通行手形に押してしまう。これこそ南北的な主題であろう。

（第一番目三建目・砥上ヶ原の場）

文化十三年の秋狂言『染替蝶桔梗』（全集六）は太閤記の世界であり、本能寺の変を背景にして「双蝶々」の書き替えになっている。第一番目三建目は瀬田の橋の場、光秀閑居の場、四建目は山崎渡しの場の場、志賀郡鷹野の場、五建目は本能寺の場であり、第二番目序幕は乳守仮宅の場、二幕目は橋本の場、淀堤の場、大切は伏見南方屋の場である。光秀の娘さつきが「何をかさしくべ、焚火となして」というのに対して、春永は「心在げなその皐月、煙となすは、無用におしやれ」という。

几帳 もはや御身も網代の魚。

春永 春永が冥土の土産に、今度度働き、花ばなしく。（ト懷より前幕の袋の官府をさし出て）

これこそ時の帝より、義照へ賜はる官符。我がかばねと諸共に、火をかけ、敵へ渡すな。

几帳 心得ました。

（第一番目五建目・本能寺の場）

春永はいわば焼き魚となるわけだが、燃え上がる信長は南北の芝居にふさわしいであろう。第二番目序幕乳守坂宅の場では「ハイハイ、お火を一つお借り申ませふ」という。それは廓の世界も同様である。

お関：父は名に負ふ国主大名の、その娘にてありながら、今は廓の火車仲居、文字も同じ火の車。呵責の増える心の苦しみ。それも夫の失ないし、その一腰を取得ん為。首尾よく剣が手に入上は、与五郎さんの身の出世…
(第二番目二幕目・橋本の場)

お関は夫のため剣を手に入れるが、養父殺しの嫌疑がかかる。第二番目大切は伏見南方屋の場だが、「風呂場と書た行燈」に注目してみなければならぬ。

三 モシ、熱くばうめてあげませふか。(トこの声にお関、思ひ入在て、持たる包をよき所へ一寸かくし、ホツト思ひ入。この時、てんつつになり、向ふより触れ書を持出て、門口へ来て)

要助 モシ、お頼み申ませふ。モシお触れでござります。お袋さんお袋さん。(第二番目大切・伏見南方屋の場)
「モシ、熱くばうめてあげませふか」の一言に怯えるのは、それが南北的存在の核心を突いているからであろう。お関は人相書で指名手配となっていたが、「いつそ私は。熱ふて熱ふて、身内がひりひりと、わたしや水をたんとむめて貰ひました」と語っている。南北劇の女とは焼かれて「身内がひりひり」する存在なのである。

文化十四年の弥生狂言『桜姫東文章』(全集六)は『閨扇墨染桜』(文化七年)、『隅田川花御所染』(文化十三年)と同じく「隅田川」の世界になっている。第一番目発端は江の嶋児ヶ淵の場、序幕は新清水の場、桜谷草庵の場、二幕目は稲瀬川の場、三幕目は押上植木屋の場、郡治兵衛内の場、四幕目は三囲堤の場、五幕目は岩淵庵室の場、六幕目は山の宿町の場である。

本作は「自久房白菊の因果物語を、清玄桜姫にとり結び」、迷子を探す場面から始まる。迷子の二人のうち稚児の白菊だけ入水し、清玄のほうは生き延びる。「海中より心火燃上る」とあるが、再び「心火」が燃え上がる展開が予想されるだろう。それが桜姫と清玄のドラマになる。

桜姫 …いふにいわれぬこと事ゆへに、尊きお身を勿体ない。罰も報いもいまの間に、廻る車は焦熱の、呵責

の責より、恐ろしき、無失の罪にいざないし、憎い女子とお腹も立ふ。そのお恨は清玄さま、おゆるしなされて下さりませ。

(第一番目序幕・桜谷草庵の場)

かつて自らを犯した権助を慕う桜姫は、偽って女犯の相手は清玄だと告白する。二人ともに追放されるが、二人の恥辱は「焦熱」を帯びたものであろう。権助と桜姫は足を擦り合わせることで、火を起こしていたといつてもよい。桜姫の身替わりとして小雛が殺されるのも、熱量を高めるためである。

五郎 ササそれといふのもこの絵姿の桜姫、きびしくお尋ねあるゆへに、姫の附人稲の谷半兵衛、あいつが武士を立させんと、かわいや小ひなを首にした…かならずゆだんさつしやるな。(ト絵姿を見せる)

眼蔵 コレコレその絵姿は強気にぬれた。焚き火でかわかすその内に、このアマ鳥居へ張て置て。(ト鳥居の下
モの柱へ張て置く)

(第一番目四幕目・三囲堤の場)

桜姫は入水した白菊の生まれ変わりとされるが、濡れた絵姿は入水した姿に等しいであろう。だから、焚き火で乾かそうとするのである。初代豊国による錦絵が残っているが(大南北全集八の口絵)、清玄は桜姫が生んだ赤子を抱いて火に炙られる。

清玄 ヲヲ、又乳が呑たいか。殊にはいまの一ト降りに、身内が濡れて、それでせわるか。アアこれどふぞ、〇(ト焚付し跡を見付て)

幸ひここに野火の焚捨て。どれ、さしくべて見よふか。

(第一番目四幕目・三囲堤の場)

清玄が邪魔になった悪党たちは毒殺を企む。これは、お岩毒殺の先駆といえるだろう。「これサ。あの毒でいかなえ時は、まだ仕様はいくらもある。どうで病害けた師匠坊、殺されねえでも近い内に、くたばるは見るやうだ。一日一日居候ふに居て、食ひ潰されようより、殺してしまふが向うも勝手、此方も仕合せ、両為めといふものだ」、「なる程、手短かにそれもよからう。アレアレ、爛子の湯が、沸えこぼれるよこぼれるよ」。青蜥蜴の毒を口にした清玄の顔は変化していく。

長浦 アレアレ、清玄の顔が、片ツ面変つた変つた。

残月 大きな声をさつしやるな。毒がかかつて変つたの。こりやモウ絞め殺して。(ト兩人していろいろ立廻り

…

(第一番目四幕目・三囲堤の場)

清玄は顔面の変貌を蒙ることで、南北的存在となるのである。清玄の死体を埋めるために呼ばれたのが穴掘りの権助だが、そこで桜姫と再会する。

権助 仏の穴を掘るおれが、腕へ彫つたはこの通り、そこで異名を釣鐘権助。この刺青を女房も、同じく彫つた、腕はこれだワ。(ト桜姫の手を捲り上げ、釣鐘の彫つたるを見せる)

残月 イヤア、姫の腕に釣鐘を、同じく彫つてござるとは。

長浦 イヤモウ呆れたお姫様。

(第一番目四幕目・三囲堤の場)

桜姫は二重の存在といえる。釣り鐘権助の愛人であると同時に、白菊の生まれ変わりだからである。桜姫は雷鳴に震えながら権助の帰りを待つが、落雷によって蘇生した清玄が現れる。

桜姫 エエ。すりや稚児の白菊が、生れて来たは妾かえ。

清玄 証拠は即ちこの香箱。握りし儘に誕生の、姫は白菊、この清玄とは前生より、重縁重なる互ひの恋路。因果の道理を弁へて、心に随ひ色好い返事。コレ、拝むわいの拝むわいの。(第一番目五幕目・岩淵庵室)

妄執に苦しむ清玄にとどめを刺すのは桜姫である。殺された清玄は火となつて現れる(これにてドロドロ打上がる。心火消える)。系図を手に入れ帰ってきた権助は上機嫌だが、火傷する。

権助 何だか表で、○(ト門口へ出よふとする時、火鉢にかけしどびんをけかへし、炭火ばつと立つて、沸茶足へかかりし思入)

アツツアツツアツツ。(ト足をおさへる) …

権助 エエ大きにやけどをした○これ、かかアや、ほんに久しぶりで帰つたの。今夜はすてきに寝にやならアならねへ…

(第一番目六幕目・山の宿町の場)

煙草を契機として、清玄の亡霊が現れる。「薄ごろごろ、寝鳥、この行燈共にしぜんと跡じさになる。ともせし明りくらくなると思へば、又ぱつとあかるくなる。いろいろとあつて、行燈跡じさりになるにしたがひ、桜姫きせるを持たるまま、前へいざり出る事あつて、ふつと心付、上の方に建である二まい折の屏風の影より、清玄の死霊にて

忽然とあらわれ、この行燈を手を延して引ている事」。亡霊の清玄は権助が自らの弟であることを指し示し、上機嫌な権助は自らの正体を明かしてしまう。権助が親の仇であることを知った桜姫は、我が子ともども刺し殺す。「悪人ながら親と子の、ぼだいの為の／人ごろし」と語っている。

公卿の娘が宿場女郎に転落した巷説が題材になったようだが、本作は入水した白菊を供養するために火が燃え上がるドラマとなる。だから、白菊の生まれ変わりとしての桜姫は自滅しなければならない。と同時に、桜姫が元の姫君に戻るためには、すべてを消し去る必要があり、親の仇として夫と我が子を自ら殺すのである。

文化十二年の顔見世狂言『大和名所千本桜』（全集六）は『義経千本桜』（延享四年）を書き換えたもので、第一回目四建目が摂州尼ヶ崎の場になっている。

本作で燃え上がるのは平家の死霊たちである。「サアサア、あがりませあがりませ、蕎麦のあつもりあんばいよしつね」と呼び込みで始まる本作は、生蕎麦が平家の怨念で茹で上がるドラマといえるかもしれない。主人公の蕎麦屋丹藏、実は入江の丹藏が平家の宝剣を守っている。

西念…天運来つて判官が、今鎌倉と同士討の折を窺ひ御一門、恨みを散ずる時節到来、コレを未来の思ひ出に、成仏あれや知盛公、なむあみだぶつなむあみだぶつ。へト回向する。どろどろになり、兜の上へ心火燃えあがり…
（第一番目四建目・摂州尼ヶ崎の場）
いづくよりかは怪しの心火…

大事な手紙を読むときも、火が不可欠である。「飛脚提灯を持ち出て来り、梶原とすれ違ひ、舞台へ来り、あかりにてちぎれし書き物を拾ふ。両人は両花道にとまり、行李をそつとあけて内を見ること、重長はあかりにて書き物を見る」。

海の中の猛火は滅んだ平家の怨念にほかならないだろう。「海の中がぴかりぴかりとひかり申して、沖の方で大勢の声で鬨をつくると、そこら中へ猛火がすさまじく出ますわ。何でもあれは平家の死霊が海の中で、戦さをはじめると見えるわえ」と庄屋は語っている。

御厩喜三太妹寄せ浪、玉虫姫の霊、川連妹飛鳥、これら女たちは平家の宝剣を奪い合う。

寄浪 御剣を渡しや。(ト西念に取りつく…)

玉虫 今ぞ知る、みもすそ川の流れに、

飛鳥 浪の底にも都ありとは。(…舞台前の髑髏に足の生へし蟹と見えるをば、雨落の浪板よりのこらず這ひ出て、飛鳥にまどふ思入。向ふの打抜の浪間へ焼酎火所々を飛びまはる。飛鳥これを見て、ウンと思入。丹藏心づき丹藏 怪しき女。(ト飛鳥に組みつくを振り払つて、宝剣にて丹藏が肩へ斬り込む、丹藏立ちながら苦しむ。この時大どろどろになり、髑髏焼酎火、一時に消える)

(第一番目四建目・摂州尼ヶ崎の場)

ここでも火を通したものが南北劇を特徴づけるのである。森山重雄『鶴屋南北絢交ぜの世界』(三一書房、一九九三年)は絢い交ぜの世界を強調するが、そこに火の要素が織り込まれている点を重視しておきたい。何よりもダンマリは火の効果といえるだろう。火を消して、無言劇を繰り広げるからである。台詞と身振りが演劇の二大要素だとすれば、台詞に頼らない身振りは演劇の一面を魅力的に提示している。逆に、火が点るダンマリホドキの場面では饒舌を振るい熱気を帯びる。

おわりに——人とたばこのよしあしは

本試論Ⅰでは文化年間の南北作品を辿ってきたが、そこから浮かび上がってきたのは火傷のテーマというべきものである。火傷とは何か。それは火を扱う人間固有の刻印であろう。近松的な宙吊りの演劇、黙阿弥的な洗練の演劇とは異なる火の試練が南北劇なのである。自ら顔を焼く『夏祭浪花鑑』三婦内の場の影響などもあるだろうが、火の残酷さが南北劇を特徴づける。人類誕生以来、火のそばで行われてきたことが独特な劇場空間に凝縮されているといってもよい。南北作品とは一言でいえば、登場人物が火傷する劇だが、それは筋の展開にかかわるだけではない。火傷は存在論的な意味をもつ。

文化十二年『杜若艶色紫』(全集五)には「人とたばこのよしあしは／けむりとなつて後の世にしろ」とあるが、この人間観は旧世界が新世界と出会うことによつて生まれたものにちがいない。同じ台詞は文政八年『御国入曾我中

村』『紋儘五人男』（全集十）にもあり、火を通したもの、煙となるものが南北の世界を構成している。南北劇で裸の子が泣き続けているのは、そんな人間の真実を告げるためではないだろうか。

訂正、本誌四〇号三一頁一行目「468.189pt」→削除

